

ISSN 2187-0691

Japanese Journal of Maritime Activity

Vol.13 No.3

第13卷 第3号

海洋人間学雑誌

March 2025

令和7年3月



日本海洋人間学会

Japan Society for Maritime Activity

目 次

研究資料

- 海上保安庁の SUP の事故データに基づく事故防止対策に関する研究……………60
伊藤裕樹，千足耕一.

事例報告

- 伝統文化帆掛サバニを活用した大学実技授業の実践報告 ……………67
遠矢英憲，石橋千征

第 13 回日本海洋人間学会大会講演録

- 第 13 回日本海洋人間学会大会 基調講演 講演録
海洋スポーツによる地域振興……………73
- 第 13 回日本海洋人間学会大会 アカデミックコンテスト 開催概要
「海洋人間アカデミックコンテスト」ポスター発表……………85

編集後記/87

□研究資料□

海上保安庁のSUPの事故データに基づく事故防止対策に関する研究

伊藤裕樹¹，千足耕一²。

¹海上保安庁第三管区海上保安本部警備救難部救難課/東京海洋大学大学院；²東京海洋大学。

海洋人間学雑誌, 13(3):60-64, 2025.

(受付: 2022年11月29日; 最終稿受理: 2025年1月20日)

【抄録】

近年、スタンドアップパドルボーディング (SUP) は、手軽にできるスポーツの一つとして人気を集めている一方で海上における SUP の事故も増加している。海上保安庁によると、2009 年に同庁が初めて SUP の事故を取扱って以降、事故は増加し 2021 年には過去最高の 68 人となった。本研究では、同庁が公表している 2016 年から 2021 年までの SUP の事故に関するデータを二次利用し分析を行い、SUP の事故の特徴を把握するとともに事故防止対策を提示し事故者減少の一助となる基礎資料を作成することを目的とした。分析の結果、事故者の経験年数、事故内容、死亡行方不明の事故事例及び SUP の現状から、SUP の事故は気象海象の判断等を含め、SUP で活動をする上で必要な知識技能不足が大きな要因になっていることなどが考えられる。このことから関係団体によるスクール等の講習を受講し、気象海象の判断を含め、SUP の活動に必要な知識技能を身につけ、特に初心者は穏やかな海面での活動が推奨されると考えられる。

キーワード: 海洋スポーツ, SUP, 海難, 海上保安庁。

I. 緒言

近年、スタンドアップパドルボーディング(SUP)は、海のほか、川、湖などの水辺でボードの上に立ちシングルパドルで漕ぐといった誰でも手軽にできるスポーツの一つとして人気を集めている。そのルーツは諸説あるなかで、1960年代のハワイ、オアフ島ワイキキのビーチボーイと呼ばれる人達がサーフボードの上に立ち、アウトリガーカヌーのパドルで漕ぐといった遊びが原点とされている。そして21世紀初頭、その手軽さからサーフィンのみならず様々なスタイルの遊び方が急激に世界中へ広がっていったとされている¹⁾。日本では、2000年代に入り、ウィンドサーファーやパドラーを中心に徐々に全国に広まっていったとされ、そのスタイルは、SUPサーフィンやSUPツーリングの他、SUPフィッシング、SUPヨガなど他のスポーツとの組み合わせなど、年々多種多様な広がりを見せている²⁾。このようにSUPは近年広まった比較的新しいスポーツであることからSUPに関する学術的研究はほとんど行われていないなか、平野³⁾が行った一般社団法人日本スタンドアップパドルボード協会のレース、イベント等に参加した愛好者を対象にした研究において、SUPの普及は初期段階にあるとし、さらに普及を促進するためには安全対策、ルールの周知、指導者の育成、他の競技団体との関係調整などの環境整備の必要性について指摘している。同じく平野⁴⁾が行ったSUPインストラクター指導者を対象とした研究において、漂流や衝突事故、漁業者や他のレジャー愛好者とのトラブルなどが報告されており、早急な対策が望まれるとしている。

SUPの事故統計は、海上保安庁のみが示していることから川などの内水面で発生した事故の状況は不明であ

る。同庁は我が国の領海等において発生した事故、所謂「海難」の発生状況を「海難の現況と対策」として毎年公表しており、海難は「船舶事故」と「人身事故」に分類され、SUPの事故は、「人身事故」の中の「マリネジャーに伴う海浜事故」に位置付けられている。2009年に同庁が初めてSUPの事故を取扱って以降、事故は増加⁵⁻⁹⁾し2021年には過去最高の68人となった(図1)。

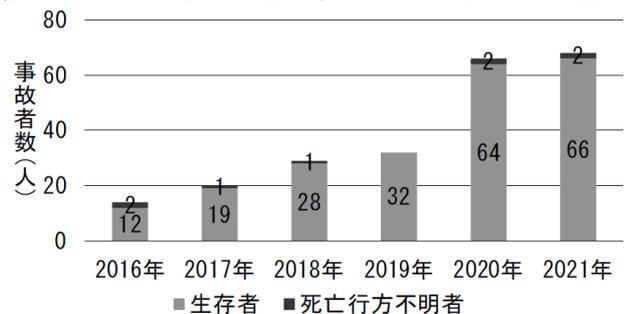


図1. SUPの事故の推移
引用文献5-10)より筆者作成)

II. 目的

本研究では、海上保安庁が公開したSUPの事故に関するデータを二次利用して分析を行い、SUPの事故の特徴を把握するとともに事故防止対策を提示し事故者減少の一助となる基礎資料を作成することを目的とする。

III. 方法

本研究では海上保安庁が公表した「海難の現況と対策」⁵⁻⁹⁾及び同庁で開催されたSUP安全対策会議において配布された「SUP安全対策会議資料」¹⁰⁾に掲載されている2016年から2021年までのSUPの事故に関するデ

一タ(事故者の経験年数、事故内容、事故発生時の風速及び風浪の高さ(波高))を用いて単純集計による分析を行い事故の特徴を把握した。次に、単純集計によって得られた SUP の事故で最も多い帰還不能について、経験年数を事故者の知識技能の量として考え、事故者の知識技能(経験年数)と事故発生時の風速及び波高の関連性に関し、事故者の経験年数各群と帰還不能時の風速及び波高の平均順位に差があるか比較するため、有意水準を5%としKruskal-Wallis検定を行った。また、2016年から2021年に発生した死亡行方不明事故8件¹⁰⁾について、事故内容、死亡行方不明の別、経験年数等の人的要因、気象海象等の環境要因、ライフジャケット等安全装備の装着状況等の安全行動要因に分類して単純集計による分析を行い、その特徴を把握した。なお、全ての統計分析にはEZR(Ver2.7-1)¹¹⁾を使用した。

IV. 結果

1. 事故者の経験年数について

2016年から2021年までの間に発生した SUP の事故の事故者数は229人であった(図1)。事故者の経験年数は、「はじめて」が61人(27%)、「1年未満」が71人(31%)、「1~3年未満」が49人(21%)、「3~5年未満」が18人(8%)、「5~10年」が6人(3%)、「10年以上」が2人(1%)、「不詳」が22人(10%)であり、「1年未満」の事故者が最も多かった(図2)。また、経験年数3年未満の事故者が全体の79%(181人)を占めていることが分かった。

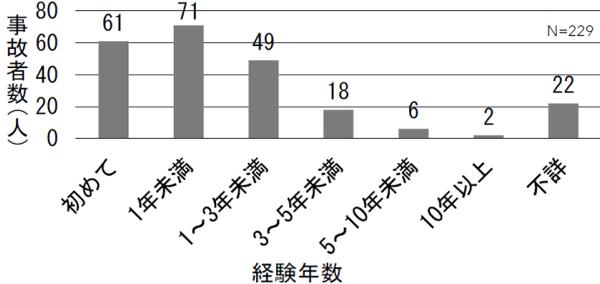


図2. 事故者の経験年数 (2016年から2021年) 引用文献5-10)より筆者作成

2. 事故内容及び原因について

2016年から2021年までの間に発生した SUP の事故の事故内容は、帰還不能が204人(91%)、負傷が18人(8%)、溺水が7人(3%)であり「帰還不能」が最も多かった(図3)。帰還不能の原因は、自己の過失が186人(91%)、他人の過失が16人(8%)、不可抗力2人(1%)であり、自己の過失が最も多かった。自己の過失の内訳は、気象海象不注意が89人(48%)と最も多く、次いで知識技能不足が76人(41%)と多かった(図4)。

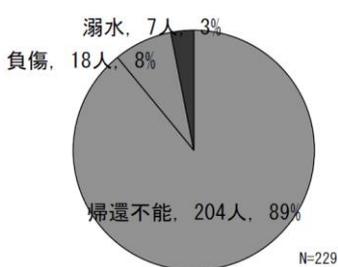


図3. 事故内容 引用文献5-10)より筆者作成

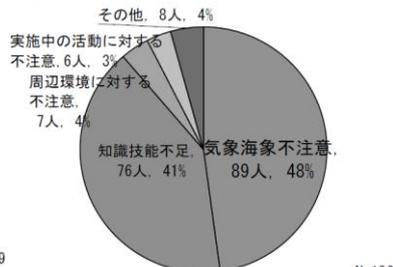


図4. 帰還不能における自己の過失内訳 引用文献5-10)より筆者作成

3. 帰還不能時の風速及び事故者の経験年数について
 帰還不能の事故者204人の事故時の風速について、平均±標準偏差は7.55±3.49m/s、中央値(四分位範囲)は7m/s(5-10m/s)であった。低い風速域で事故が発生しており、風速5m/sから10m/sの風速域には事故者の半数以上(66%)が存在していることが分かった。また、風速0m/sでは帰還不能が発生していないことが分かった(図5、図6)。

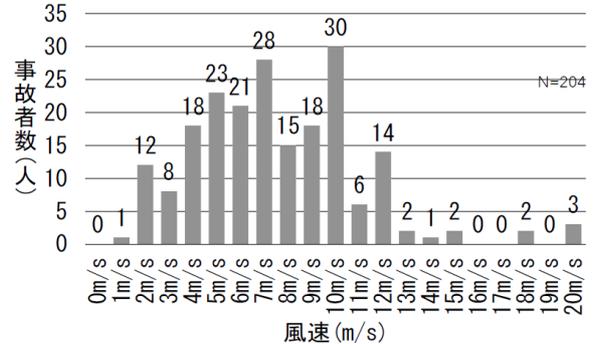


図5. 帰還不能時の風速 (2016年から2021年) 引用文献5-10)より筆者作成

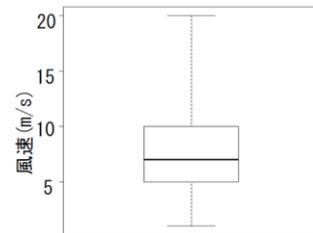


図6. 帰還不能時の風速の分布 (2016年から2021年) 引用文献5-10)より筆者作成

帰還不能の事故者204人の経験年数は、「1年未満」が69人(34%)と最も多く、次いで「初めて」が56人(27%)、「1~3年未満」が44人(22%)と帰還不能の事故者の83%が経験年数3年未満の事故者であることが分かった。次に、事故者204人のうち経験年数不詳の17人を除いた187人について、事故者の経験年数各群と帰還不能時の風速の平均順位に差があるか比較をするため、Kruskal-Wallis検定を行った結果、有意差は認められなかった。また、事故者の経験年数群毎に帰還不能時の風速(平均値)を比較すると、「初めて」は8.34m/s、「1年未満」は6.88m/sに減少し、「1年未満」以降は経験年数が増えるにつれて風速(平均値)の値を見る限り増加している傾向であった(表1)。経験年数群毎の中央値を比較したところ同様の傾向であった(図7)。

表1. 帰還不能時の経験年数群毎の風速 引用文献5-10)より筆者作成

経験年数	事故者数(人)	各群の平均風速(m/s)±標準偏差
初めて	56	8.34 ± 4.25
1年未満	69	6.88 ± 3.03
1~3年未満	44	7.25 ± 2.84
3~5年未満	11	8.73 ± 4.22
5~10年未満	6	9.17 ± 3.71
10年以上	1	10.0 ± 0.00
不詳	17	6.94 ± 3.13

n.s.

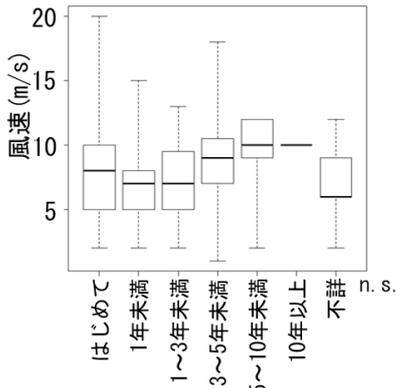


図7. 帰還不能時の経験年数群毎の風速
引用文献 5-10) より筆者作成)

4. 帰還不能時の波高及び事故者の経験年数について
帰還不能の事故者 204 人の事故時の波高について、平均±標準偏差は 0.70±0.43m、中央値(四分位範囲)は 0.5m(0.5-1m)であった。低い波高で事故が発生しており、波高 0.5m で最も多く発生し、次いで、波高 1.0m が多く発生していた。この間に事故者の半数以上(76%)が存在していることが分かった。また、波高 0m でも帰還不能は発生していることが分かった(図 8、図 9)。

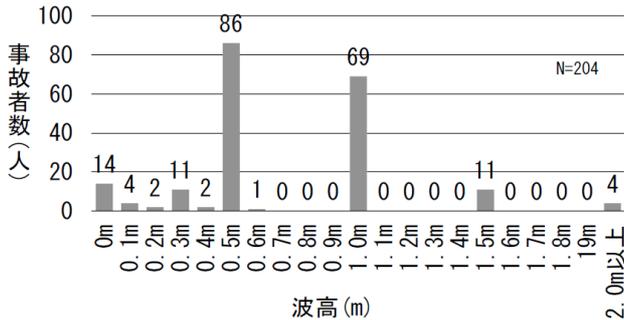


図8. 帰還不能時の波高 (2016年から2021年)
引用文献 5-10) より筆者作成)

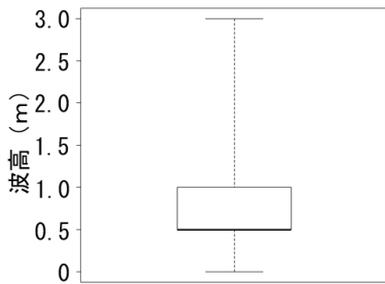


図9. 帰還不能時の波高の分布 (2016年から2021年)
引用文献 5-10) より筆者作成)

次に、事故者 204 人のうち経験年数不詳の 17 人を除いた 187 人について、事故者の経験年数の各群と帰還不能時の波高の平均順位に差があるか比較を行なうため、Kruskal-Wallis 検定を行った結果、有意差は認められなかった。また、事故者の経験年数各群と帰還不能時の波高(平均値)を比較すると、「初めて」は 0.72m、「1年未満」は 0.68m、「1~3年未満」は 0.67m と僅かに減少し、「3~5年未満」は 0.91m、「5~10年」は 1.17m と増加し、「10年以上」は 1.00m(1人)であった(表 2)。経験年数群毎の中央値を比較したところ、「初めて」

「1年~3年未満」まで波高は 0.5m、「3~5年未満」以降は同様の傾向であった(図 10)。

表 2. 帰還不能時の経験年数群毎の波高
引用文献 5-10) より筆者作成)

経験年数	事故者数 (人)	各群の平均波高(m) ±標準偏差
初めて	56	0.72 ±0.45
1年未満	69	0.68 ±0.44
1~3年未満	44	0.67 ±0.35
3~5年未満	11	0.91 ±0.54
5~10年未満	6	1.17 ±0.41
10年以上	1	1.00±0.00
不詳	17	0.5 ±0.31

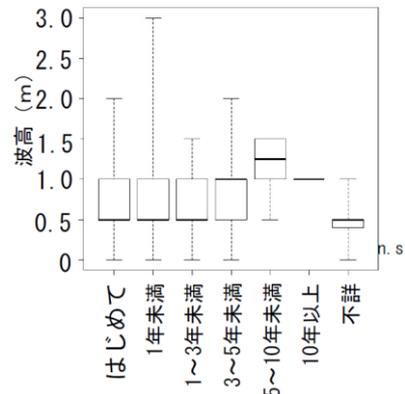


図10. 帰還不能時の経験年数群毎の波高
引用文献 5-10) より筆者作成)

5. 死亡行方不明事故について

死亡行方不明事故 8 件の事例から、事故内容、死亡行方不明の別、事故者の経験年数、活動頻度、事故発生時の風速及び波高、ライフジャケット及びリーシュコードの装着状況を抽出し、人的要因(経験年数、活動頻度)、環境要因(風速、波高)、安全行動要因(海上警報等発令状況、ライフジャケット及びリーシュコード装着状況、乗艇人数、飲酒の状況)に分類した(表 3)。事故内容では、8人中7人(86%)が溺水、1人(13%)が負傷であった。なお、負傷はインストラクター1人がツアー客6名を引率している中、漁船と衝突しツアー客1人が死亡したものである。

表 3. 死亡・行方不明者の事故事例
引用文献 10) より筆者作成)

No.	事故内容	死亡・行方不明の別	人的要因		環境要因		安全行動要因				備考	
			経験年数	活動頻度	風速 (m/s)	波高 (m)	海上警報等	ライフジャケットの有無	リーシュコードの有無	乗艇人数 (人)		飲酒の有無
1	溺死	死亡	不明	年数回数不明	7.0	0.0		無	無	3	無	
2	溺死	死亡	3-5年未満	週1回程度	6.0	0.5		無	無	1	無	
3	溺水	死亡	不明	不明	6.0	0.4		無	無	3	有	
4	溺水	死亡	3-5年未満	年1~2回程度	3.0	0.5		無	不明	1	有	再乗艇出来ず
5	溺水	行方不明	不明	年1~2回程度	7.0	1.0	発令中	無	無	1	無	
6	溺水	死亡	不明	年数回数不明	6.0	0.1		有	有	1	無	
7	溺水	死亡	不明	週複数回	11.0	1.0	発令中	無	不明	1	無	
8	負傷	死亡	3-5年未満	年1~2回程度	2.0	0.5		有	不明	1	無	船船との衝突

A. 人的要因について

人的要因は、事故者の経験年数及び活動頻度として検討を行った。事故者の経験年数は8人中5人が不明であり、経験年数が判明している3人は「3~5年未満」であった。活動頻度は、8人中7人が判明しており、年1~2回程度が3人と最も多く、次いで年数回程度が2人、週1回程度及び週複数回がそれぞれ1人であった。

B. 環境要因について

環境要因は、活動時の海況に影響を与える事故発生時の風速及び波高として検討を行った。事故発生時の風速の平均±標準偏差は6.00m/s±2.55m/sであった。また、事故発生時の波高の平均±標準偏差は0.50m±0.34mであった。帰還不能時の風速及び波高と比較すると低い値で死亡行方不明事故が発生していることが分かった。

C. 安全行動要因について

安全行動要因は、海上警報及び注意報等の発令状況、浮力を確保するための安全装備であるライフジャケット及びリーシュコードの装着状況、ボードの乗艇人数、飲酒の状況として検討を行った。

海上警報等発令中の事故者は8人中2人(25%)、ライフジャケットを着用していたのは8人中2人(25%)、リーシュコードを装着していたのは8人中1人(13%)であった。なお、事故者発見時にリーシュコードの装着状況が不明の者が3人いたが、出艇時からしていないのか又は遭難中に外れたのかは不明であることから未装着とした。ボードに複数人乗艇していた中で事故が2件発生しており、死亡した2人はいずれもライフジャケット及びリーシュコードは装着しておらず、浮力が確保できていない状態であった。飲酒を伴う事故者が8人中2人(25%)いた。

V. 考察

2016年から2021年のSUPの事故者229人について、経験年数3年未満の事故者が全体の79%(181人)を占めていたことから初心者の事故が多いことが分かった。また、海上保安庁が2022年に実施した調査¹⁰⁾では、事故者62人のうちSUPを始めるにあたりスクール等で習ったことがある者の割合は15%(9人)であったことから、事故者はSUPを行なうにあたり、スクール等で必要な知識技能を身に付けずにまま出艇し事故に遭っていることが推察された。

事故内容で最も多い帰還不能について、事故者の経験年数と帰還不能時の風速及び波高について分析した結果、統計学的に有意な要因を特定することはできなかったが、経験年数や風速及び波高に関わらず事故に遭うリスクがあることが考えられる。「初めて」を除くと経験年数が長くなるにつれて風速及び波高が増加している傾向が見られた。このことは、経験年数が上がるにつれてよりハードな海況で活動をする傾向にあることが考えられ、事故者の過信が帰還不能の一因である可能性が推察された。一方、「初めて」の事故者については、SUPの活動に必要な気象海象に関する知識が不足していたため、自身の技能が活動海域の海況で対応可能かを適切に判断する力が不足し、事故に至った可能性が考えられる。その結果、経験者であれば出艇を避けるような状況でも出艇したこと、立って漕ぐことに集中するあまり気象海象の変化に対する注意力が低下し、

変化に気づいた時には帰還不能を回避できない状況になっていたことが推察された。

帰還不能時の風速について、実際に各風速域で活動している愛好者の人数は不明ではあるが帰還不能時の風速の状況から、風が帰還不能の一因である可能性が考えられる。特に、風速5m/sから10m/sの風速域に事故者の66%が集中していることから、風速5m/s以上はよりリスクが高いことが考えられる。また、風速10m/sの海況は海面の状況から風力を推定するビューフォート階級表¹²⁻¹³⁾(表4)によると白波が沢山立っている状況であり、一般愛好者がボードの上に立って漕ぐことは困難であると考えられ、出艇後に風が強まり帰還不能に陥った可能性があることが推察された。また、帰還不能時の波高について、波高0mでも帰還不能は発生していることから波が無くても不安定なボードの上に立って漕ぐことはパドリング技術など必要な知識技能を身に付けていない初心者は容易ではない可能性があることが推察された。

死亡事故において、落水後に再乗艇できずに溺水に至った事例のように再乗艇出来ずに漂流しているケースも考えられる(表3)。筆者自身も再乗艇出来ない帰還不能者を救助した経験があり、知識技能不足も帰還不能の一因であることが考えられる。さらに波高0.5mから1.0mの間に事故者の77%が集中していることから、波高0.5m以上はよりリスクが高いと考えられる。波高1mの海況も前述と同様に再乗艇後に風が強まり帰還不能に陥った可能性があることが推察され、常に海況の変化に注意をしながら自身の技能で活動可能かを判断することが重要である。

SUPを楽しむうえで常時風速を確認できる機器も持っていないなか海面の状態から風力を判断する能力をつけ、関連団体による講習が実施されるべきと考える。

死亡行方不明事故について、環境要因である風速及び波高を帰還不能と比較すると低い値で発生しており、さらに安全行動要因である自身の浮力を確保するためのライフジャケットやリーシュコードの不備が8人中7人(88%)であった。また、ライフジャケット等を装着しないで1枚のボードに複数人が乗っていたこと、海況が更に悪化されることが予想される海上警報等発令中に活動していたこと、飲酒をして活動していた状況から安全行動の欠落による要因の影響が大きいと考えられる。特にライフジャケット及びリーシュコードの不備が死亡行方不明事故の大きな要因であることが考えられる。

一方で、活動に適した水面について、先行研究や指導団体は穏やかな海面での活動を推奨している。河合¹⁴⁾の先行研究ではSUPというスポーツはフラットウォーターにて始めれば、誰でも楽しめる簡単なスポーツであるとしている。また、日本レクリエーションカヌー協会(JRCA)ではフラットウォーターと呼ばれる穏やかな海面(水面)でSUPを行なうことを推奨¹⁾しており、一般社団法人日本セーフティパドリング協会では風は直接的にボードに影響を与え、体で風を受けやすいSUPは注意が必要とし、無風状態を初心者や体験会に適した水面としている²⁾。関係団体はこのような海況での活動を推奨していることから一般的には穏やかな海面で活動している愛好者が多いことが推察できる。事故の発生状況からも特に初心者は無風又はより無風に近い

表 4. ビューフォート階級表(気象庁風力階級表)
引用文献 12-13) より筆者作成

階級	海面の状態	相当風速	参考波高(最大)
		メートル毎秒	メートル
0	鏡のような海面	0~0.2	-
1	うろこのようなさざ波が出来ているが、波頭に泡は無い。	0.3~1.5	0.1(0.1)
2	小さい小波が出来ている。波長は短いのがはっきりわかる。波頭は滑らかに見え、砕けていない。	1.6~3.3	0.2(0.3)
3	大きい小波が出来ている。波頭が砕け始め、泡がガラスのように見える。ところどころに白波が現れることもある。	3.4~5.4	0.6(1)
4	小さい中波が出来ている。波長は3より長く、白波がかなり多い。	5.5~7.9	1(1.5)
5	中位の波で波長は4より長く、一層はっきりしている。白波が沢山立っている。(しぶきを生じていることが多い。)	8.0~10.7	2(2.5)
6	中波の大きいものが出来始める。至るところで、波頭が白く泡立ち、その範囲は5より一層広い。(しぶきを生じていることが多い。)	10.8~13.8	3(4)
7	波は、6より大きく、波頭が砕けて出来た白い波は、筋を引いて風下に吹き流されている。	13.9~17.1	4(5.5)
8	大波のやや小さい波で、波長は長い。波頭の端は、砕けて水煙となり始める。泡は、はっきりした筋を引いて風下に吹き流されている。	17.2~20.7	5.5(7.5)
9	大波。泡は濃い筋を引いて、風下に吹き流されている。波頭は、のめり、崩れ落ち、逆巻き始める。しぶきのため、視程が悪いこともある。	20.8~24.4	7(10)
10	波頭が、長くのしかかるような非常に高い波。大きな固まりとなった泡は、濃い白色の筋を引いて、風下に吹き流されている。海面は全体として白く見える。波の崩れ方は、激しく、衝撃的である。視程が悪い。	24.5~28.4	9(12.5)
11	山のように高い大波。中小船舶は、一時波の陰に見えなくなることもある程の大波。海面は、風に吹き流された長い白色の泡の固まりで完全に覆われている。至る所で波頭の端が吹き飛ばされて水煙となり、視程が悪い。	28.5~32.6	11.5(16)
12	大気が泡としぶきで充滿している。海面は、吹き飛ばしぶきのために、完全に白くなっている。視程が著しく悪い。	32.7~	14(-)

(備考)参考波高は、陸岸から遠く離れた外洋において生じる波の高さのおおよその目安を与えるだけのものである。波高のみを観測し、逆に風力を推定するのに用いてはならない。内海あるいは陸岸近くで、沖に向かう風の場合には波高はこの表に示された数値より小さくなり、浪はとがってくる。

穏やかな海面での活動が推奨されると考えられる。

本研究で示した事故者の経験年数、事故原因、死亡行方不明の事故事例及び SUP の現状から、SUP の事故は気象海象の判断等を含め、SUP で活動をする上で必要な知識技能不足が大きな要因になっていることが考えられる。SUP の事故者が増加しているなか、海での SUP を規制することも一案ではあるものの既にレジャーとして定着し、楽しまれている現状を考慮すると良案であるとは考えられず、関係団体によるスクール等での講習の受講をより強く推奨していくことが望ましく必要不可欠であると考えられる。

V. 結論

2016 年から 2021 年までの SUP の事故について分析した結果、次のことが分かった。

- ①事故者は経験年数 3 年未満が多い
 - ②事故内容では帰還不能が最も多い
 - ③帰還不能は、風速 0m/s では発生しておらず、広い風速域で発生していることから風が強く影響していると考えられる
 - ④帰還不能は、風速 5m/s 以上、波高 0.5m 以上でよりリスクが高いと考えられる
 - ⑤死亡行方不明を伴う事故は、自身の浮力を確保するためのライフジャケットやリーシュコードの不備が大きな要因であると考えられる
- これらのことから SUP の事故で最も多い帰還不能は、気象海象の判断等を含め、SUP で活動をする上で必要な知識技能不足が大きな要因になっていることが考えられる。したがって、SUP で安全に活動するため、次のことを推奨する。

- ・関係団体によるスクール等の講習を受講し、気象海象の判断を含め、SUP の活動に必要な知識技能を身につけてから活動すること
- ・ライフジャケット及びリーシュコードを装着し浮力を確保すること
- ・出艇前に気象予報や海況を確認するとともに活動中も海況の変化注意し、特に初心者はより穏やかな海面で活動すること

VI. 今後の課題

本研究結果を踏まえ、今後、事故を起こしていない一般愛好者の活動実態を調査することで、事故者のデータと比較が可能となり、SUP の事故の大きな要因である気象海象の判断を含めた知識技能不足に至る要因などの分析が行え、より効果的な事故防止対策の提案が行えるものと考えられる。

謝辞

本研究にあたり、ご協力いただいた関係者の皆様に感謝し厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 辰野勇: SUP スタンドアップ・パドル・ボーディングを安全に楽しむ日本レクリエーションカヌー協会(JRCA)編. 株式会社ネイチュアエンタープライズ, 大阪府, p6-9, p28-29, 2021.
- 2) 一般社団法人日本セーフティパドルリング協会: JSPA 検定テキストブック. 2020, 神奈川県, 総論 p17, フィールド p12-13.
- 3) 平野貴也: スタンドアップパドルボード(SUP) 愛好者

- の実状と普及のための課題. 海洋人間学雑誌, 4(1):41-46, 2015.
- 4) 平野貴也: スタンドアップパドルボード (SUP) の活動環境における実施者の配慮行動と保全意識—インストラクター養成講習会参加者を対象に—. 海洋人間学雑誌, 9(1):10-16, 2020.
 - 5) 海上保安庁: 平成 29 年海難の現況と対策. 海上保安庁, 東京都, p90-92, 2018.
 - 6) 海上保安庁: 平成 30 年海難の現況と対策. 海上保安庁, 東京都, p68-69, 2019.
 - 7) 海上保安庁: 令和元年海難の現況と対策. 海上保安庁, 東京都, p57-58, 2020.
 - 8) 海上保安庁: 令和 2 年海難の現況と対策. 海上保安庁, 東京都, p66-69, 2021.
 - 9) 海上保安庁: 令和 3 年海難の現況と対策. 海上保安庁, 東京都, p51-54, 2022.
 - 10) 海上保安庁: SUP 安全対策会議資料(第 1 回から第 4 回). 海上保安庁, 東京都. 2022.
 - 11) Y Kanda: Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZR' for medical statistics. Bone Marrow Transplant, 48(3):452-458, 2013.
 - 12) 気象庁: 船舶気象観測指針改定 4 版. 気象庁, 東京都, p46-47, 1985.
 - 13) 気象庁: 気象観測ガイドブック. 気象庁, 東京都, p32, 2018.
 - 14) 河合辰巳: アメリカにおけるスタンドアップパドルの発展と普及に関する研究. 2013 年度早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文, 2013.



本稿は、Creative Commons ライセンス
 BY/Attribution (表示) -SA/Share-alike (継承)
 4.0 国際 (CC BY-SA 4.0) の下に公開されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

□RESEARCH MATERIALS□

Research on accident prevention measures based on Japan Coast Guard SUP accident data**ITO Yuki¹, CHIASHI Koichi².**¹ *Japan Coast Guard 3rd Regional Coast Guard Headquarters, Security and Rescue Department, Security and Rescue Division/Tokyo University of Marine Science and Technology Graduate School;*² *Tokyo University of Marine Science and Technology**Jpn. J. Marit. Activity*, 13(3):60-66, 2025.

(Submitted : 29 November 2022; accepted in final form : 20 January, 2025)

【Abstract】

In recent years, stand-up paddleboarding (SUP) has become a popular sport due to its accessibility. However SUP-related accidents on the sea have also increased. According to the Japan Coast Guard (JCG), since JCG started handling SUP accidents for the first time in 2009, the number of incidents have increased and reached a record high of 68 in 2021. This study utilizes secondary data on SUP accidents from 2016 to 2021, published by the Japan Coast Guard, to analyze and understand the characteristics of these accidents, with the goal of providing basic data that can contribute to accident reduction efforts and presenting preventive measures. The analysis found that factors such as the experience level of the accident victims, the nature of the accidents, cases of fatalities or missing persons, and the current state of SUP activity suggest that insufficient knowledge and skills, including weather and sea condition assessment, are major contributing factors to these accidents. Based on this, it is recommended that individuals participate in courses offered by relevant organizations, such as SUP schools, to acquire the necessary knowledge and skills, including the ability to assess weather and sea conditions. In particular, beginners should be encouraged to carry out the activities in calm waters.

Keyword : Marine sports ,SUP ,Marine accidents ,Japan Coast Guard.

Corresponding Author: ITO Yuki, e-mail : itou-f98g8@mlit.go.jp

□事例報告□

伝統文化帆掛サバニを活用した大学実技授業の実践報告

遠矢英憲¹、石橋千征¹。¹名桜大学

海洋人間学雑誌, 13(3):67-72, 2025.

(受付: 2025年2月28日; 最終稿受理: 2025年3月28日)

【抄録】

本研究は、沖縄の伝統的な木造船である帆掛サバニを活用した大学実技授業の実践報告である。名桜大学の専門教育科目として開講された本授業では、反転授業の手法を用い、事前学習でのオンライン教材による知識習得、実習での技能習得と地域社会との交流、事後学習での振り返りという構成で実施した。授業評価アンケートおよび Net Promoter Score (NPS) による分析の結果、総合満足度は 4.9 ± 0.4 と高い評価を得た。また、技術習得度 (4.5 ± 0.5)、理解度 (4.4 ± 0.5) とともに良好な結果となり、NPS も 62 という高い数値を示した。自由記述からは、伝統文化との出会い、実践的体験の価値、地域性に関する肯定的な評価が得られた。一方で、難易度設定や天候への対応、教材開発の必要性などの課題も明らかとなった。本実践を通じて、伝統文化を活用した大学実技授業の一事例を提示することができ、場所に根ざした教育 (Place-Based Education: PBE) の概念を参照した授業設計の可能性を示すことができた。

I. 緒言

グローバル化が加速する現代社会において、地域固有の文化や自然環境の保全と継承は、持続可能な社会の構築に不可欠な要素となっている。野外教育は、自然体験を通じて人間形成を促す教育活動であり、地域の自然と人間の関係性を築き上げてきた伝統文化を教材化することの重要性が指摘されている (Smith & Gruenewald, 2008)。土方ら (2024) は、「欧米由来とされる野外教育に、日本という場所で生まれた身体的感性が違和を感じるものがなかったらどうか」と問題提起し、国際的な先住民の知恵への注目を背景に、伝統文化を取り入れた野外教育プログラムの開発が必要であると論じている。

このような背景から、「場所に根ざした教育 (Place-Based Education: PBE)」の概念が注目されており、地域固有の自然環境や文化を活用した教育実践が、学習者の地域への理解と愛着を育み、持続可能な社会の構築に貢献する可能性が示唆されている。大学教育においても、地域社会や文化との連携を強化し、学生の地域への関心を高め、社会に貢献できる人材を育成することが求められている。Whyte (2015) は、先住民の知識を教育に取り入れることが、文化に根ざした価値観や世界観の理解を促し、地域への愛着と誇りの育成に繋がる可能性を示している。

このような状況の中、沖縄県には独自の自然環境の中で生まれた多様な伝統文化が存在する。その中でも、帆掛サバニは漁撈や輸送に用いられていた伝統的な木造船であり、沖縄の海洋文化を象徴する存在である。2000年に始まったサバニ帆漕レースを契機に、その建造技術や操船技術の復活と継承、さらには海洋文化の振興を目指す動きが活発化している。蓬郷 (2023) の調査によれば、サバニ帆漕レースの魅力として、競技性や非日常的な体験、自然と対峙する冒険的要素、達成感、

景観の美しさ、自然への理解、サバニそのものの魅力、チームワーク、仲間との交流などが挙げられており、これらは教育的価値を持つ要素であると考えられる。

本報告では、沖縄県の名桜大学において実施した、帆掛サバニを教材とした大学実技授業の実践内容とその教育効果について報告する。本実践の特徴は、反転授業 (Bergmann & Sams, 2012) を採用し、事前学習でのオンライン教材による知識習得、実習での技能習得と地域社会との交流、事後学習での振り返りという構成で実施した点にある。本報告の目的は、帆掛サバニを教材とした大学実技授業の実践内容とその結果を記述的に報告することで、伝統文化を活用した実技授業の一事例を提示することであり、今後の教育活動における伝統文化活用の可能性を示すことにある。上述の理論的背景は本実践の設計において参照したものであるが、本報告はそれらの理論検証を主眼とするものではない。

II. 目的

1. 伝統文化の教材化における理論的基盤

本授業における伝統文化の教材化については、主として以下の3つの理論的基盤を用いた。

第一に、Drucker-Ibanez & Cáceres-Jensen (2022) が指摘する「先住民知識と科学知識の統合」の視点である。これは、伝統的な知識体系と現代的な科学知識を有機的に結びつけることで、より深い学びを実現することを目指すものである。本実践では、伝統的な帆掛サバニの操船技術と現代的な海洋スポーツの指導法を統合的に扱うことでこの視点を具現化した。

第二に、Riggs (2004) が提唱する「フィールドワークと伝統知の融合」の考え方である。これは、実地での体験的学習と伝統的な知恵の学習を組み合わせることで、より効果的な教育効果を得ることを意図している。本実践では、事前学習での知識習得と実地での技能習

得を有機的に結びつけることでこの視点を実現した。
 第三に、前田(2016)が提唱する「場所に感応する野外教育」の概念である。これは、活動の場となる地域の自然・文化的特性を十分に考慮した教育プログラムの設計を重視する考え方である。本実践では、沖縄の海洋環境と文化的背景を十分に考慮したプログラム設計を行った。

2. プログラム設計の基本方針

上記の理論的基盤に基づき、以下の三つの基本方針を設定した。

A. 段階的学習の原則

本方針においては、オンラインでの事前学習を通じて必要な知識を獲得し、基礎的な技術の習得から段階的に発展的な内容へと進展させる。さらに、実践的な活動を通じて総合的な学習の実現を図る。

B. 理論と実践の統合

これは伝統的な知識の理解と実践を重視しつつ、現代的な安全管理技術を導入することを意図している。また、全ての学習内容に対して科学的な観点からの解説を付加することで、学習者の理解度の向上を企図している。

C. 地域との連携

地域の指導者との協働により学習の質的向上を図り、伝統工芸者からの直接指導の機会を確保する。これにより、地域文化への理解を促進することが期待される。これらの方針を通じて、体系的かつ実践的な学習環境の構築を目指すものである。

Ⅲ. 授業の実施内容

1. 授業の全体構成

名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科の専門教育科目として、「スポーツ健康学特別実技Ⅱ(パドルスポーツ)」を新設し開講した。シラバスにおいては「到達目標」として、①パドリングとセーリングの基本的知識・技術を習得すること、②水上での安全管理に関する知識を理解し、適用すること、③パドルスポーツを通じて環境保護の意識を高め、自然環境に対する知識を深めること、④チームワークとリーダーシップスキルを発展させること、を掲げた。

この授業では、帆掛サバニとSUP(スタンドアップパドルボード)の2種目を取り扱い、各1コマのオリエンテーションを行った後に帆掛サバニ実習を2日間(2024年8月22日、23日)、SUP実習を3日間(後学期授業期間の各2コマ)実施する構成とした。

受講者は8名(男子6名、女子2名)で、全員が4年次生であった。指導体制としては、専任教員2名と外部サバニ指導者1名、外部SUP指導者2名が担当した。実習は沖縄県糸満市および本部町で実施した。本稿では、以降SUP実習部分についての記述は割愛する。

2. 事前学習教材コンテンツ

Notionを利用したWebページにて、体系的な学習教材を提供した。教材は大きく三つの領域で構成されている。まず、帆掛サバニの基礎知識として、その歴史と文化的背景を動画とテキストで解説し、構造と特徴を図解とアニメーションで示し、現代における意義をテキストで説明した。次に、海洋スポーツの基礎知識として、気象・海象の理解、安全管理の基本、海上交通ルールについて、動画や図解、チェックリストを用いて解説

した。さらに、基本技術の解説として、パドリング技術とセーリング技術を動画と図解で示し、チームワークの重要性についてテキストで説明した。これらの教材は、学生が自身のペースで繰り返し学習できるよう設計されている。

3. 実習の詳細内容

サバニ実習のプログラム内容を表1に示した。

表1. サバニ実習プログラム内容

	実習初日(2024年8月22日)	実習二日目(2024年8月23日)
海象・気象条件	- 大潮(旧暦7/19) - 晴れ - 風向北西、風力2、波高0.1m - 気温33℃、水温29℃	- 大潮(旧暦7/20) - 晴れ - 風向北西、風力2、波高0.1m - 気温32℃、水温28℃
プログラム内容	1. 午前の部(10:00-12:30) 陸上 a. 導入(60分) - 全体説明 - 安全管理講習 - 装備の説明と確認 - 器材セッティング b. 基礎技術練習(90分) - パドリングフォームの基礎 - チームワークの基本 - 基本的な方向転換 2. 午後の部(13:30-17:00) 海上 a. グループパドリング(90分) - パドリングフォーム基礎 - 役割分担の確認 - 安全確認の手順 b. 中距離パドリング及びセーリング(90分) - 中距離パドリング - セーリング基礎技術 - グループでの連携練習 c. 片付け・振り返り(60分) - 技術面の課題確認 - 安全管理の再確認 - 翌日の準備	1. 岡波島ツーリング(09:00-15:00) a. 事前準備(90分) - 航程の確認 - 気象確認 - 装備点検 b. 往路(60分) - ナビゲーション実践 - チーム間の連携 - 実践的なセーリング c. 島内活動(150分) - 環境観察 - 昼食・休憩 d. 復路(60分) - 異なる気象条件下での操船 - 総合的な技術応用 - 安全管理の実践 2. 事後活動(15:00-17:00) a. 片付け(60分) b. サバニ大工からのレクチャー(30分) - 建造技術の解説 - 文化的価値の説明 - 質疑応答 c. 総括(30分) - 技術の振り返り - 文化理解の深化 - 今後の展望

3.1 実習初日(2024年8月22日)

実習初日のプログラムは、大潮(旧暦7/19)の日に実施された。当日は晴れ、風向北西、風力2、波高0.1m、気温33℃、水温29℃という、実習に適した気象・海象条件となった。

プログラムは午前と午後の二部構成で実施した。午前の部(10:00-12:30)は、陸上のみで実施した。導入セッションでは、2日間の全体説明、安全管理講習を実施し、続いてサバニ及び使用する装備の説明と確認を行い、陸上での器材セッティングへと進んだ。



図1. 陸上での準備活動



図2. グループパドリング練習



図3. セーリング基礎技術練習

午後の部（13:30-17:00）は実際に海上で実施する三つのセッションで構成した。最初の90分間はグループパドリングをテーマとした基礎技術練習に充てた。パドリングフォームの基礎から始め、チームワークの基本を学び、基本的な方向転換の練習まで段階的に進めた。グループワークとしてコミュニケーションをしっかりと行い、その中で役割分担の確認と安全確認の手順の徹底を図った。続く90分間の実践練習では、中距離パドリングを実施した後に、セーリング基礎技術の習得を行い、グループでの連携練習へと発展させた。最後の60分間は器材の片付けと振り返りの時間とし、各自の技術面での課題を確認するとともに、安全管理について再確認を行い、翌日の実習に向けた準備を行った。

3.2 実習二日目（2024年8月23日）

実習二日目は、大潮（旧暦7/20）の日に実施された。気象・海象条件は前日に引き続き安定しており、晴れ、風向北西、風力2、波高0.1m、気温32℃、水温28℃という良好な実習環境となった。

この日のメインプログラムは、6時間にわたる岡波島ツーリング（09:00-15:00）であった。まず最初の90分間を事前準備に充て、航程の確認、気象確認、装備点検を入念に行った。その後の往路（60分）では、ナビゲーションの実践を主目的とし、チーム間の連携を図りながら実践的なセーリングを行った。

島内では150分間の活動時間を設け、環境観察を行いながら地域の自然について学習した。この間に昼食・休憩を取り、地域の文化についても学びを深めた。復路（60分）では、午後の異なる気象条件下での操船技術の習得に重点を置き、これまでに学んだ技術を総合的

に応用しながら、安全管理の実践に取り組んだ。

事後活動（15:00-17:00）の前半では、片付けを行なった後に、地元のサバニ大工から30分間のレクチャーを受けた。ここでは建造技術の詳細な解説を聞き、その文化的価値について学び、活発な質疑応答を行った。後半の30分間は総括の時間とし、2日間の実習を通じて習得した技術の振り返りを行うとともに、文化理解がいかに深まったかを確認し、今後の展望について全員で議論を行った。

IV. 授業評価方法と結果

1. 授業評価の実施方法

1.1 授業評価アンケート

本実践の授業評価は、受講生からの定量的評価と定性的評価の2つのアプローチで実施した。定量的評価としては、5段階評価による授業評価アンケートとNet Promoter Score (NPS) による推奨度調査を実施した。

授業評価アンケートでは、以下の7つの項目について5段階評価（1:まったく当てはまらない～5:非常に当てはまる）で評価を求めた：

- 難易度：「全体的に授業は難しかったですか」
- 授業内容の理解度：「全体的に授業内容を理解することができましたか」
- 技術習得度：「全体的に授業で扱った技術を習得することができましたか」
- 楽しさ：「全体的に授業内容は楽しかったですか」
- 負荷：「全体的に授業はきつかったですか」
- 不安感：「全体的に授業内容は怖かったですか」
- 総合満足度：「総合的に判断して満足でしたか」

Net Promoter Score (NPS) による推奨度調査では、「この授業を友人や後輩に勧めたいと思いますか？」という質問に対して0～10点での評価を求めた。NPSは、回答を推奨者（9-10点）、中立者（7-8点）、批判者（0-6点）の三層に分類し、プログラムに対する推奨意向を定量的に把握する手法である。

定性的評価としては、自由記述による意見収集を実施した。

1.2 倫理的配慮

本報告における授業評価データの使用については、授業時に学生へ口頭および書面で研究利用の可能性について説明し、同意を得た上で実施した。データは匿名化して分析を行い、個人が特定されないよう倫理的配慮を行った。

2. 授業評価結果

授業評価調査については、受講生8名全員から回答を得た。

2.1 授業評価アンケート

授業評価アンケートの結果を図4に示した。

授業評価アンケートの結果から、授業内容の理解度は 4.4 ± 0.5 (Mean \pm SD、以下同様) と高い値を示し、技術習得度も 4.5 ± 0.5 と同様に良好な結果となった。特に注目すべきは授業の満足度が 4.9 ± 0.4 と極めて高い評価を得たことであり、総合満足度も同じく 4.9 ± 0.4 という結果であった。一方で、難易度については 2.5 ± 0.9 とやや低めの評価となり、これは授業内容がやや易しいと感じられた可能性を示唆している。

2.2 推奨度調査

Net Promoter Score (NPS) による授業全体に対する

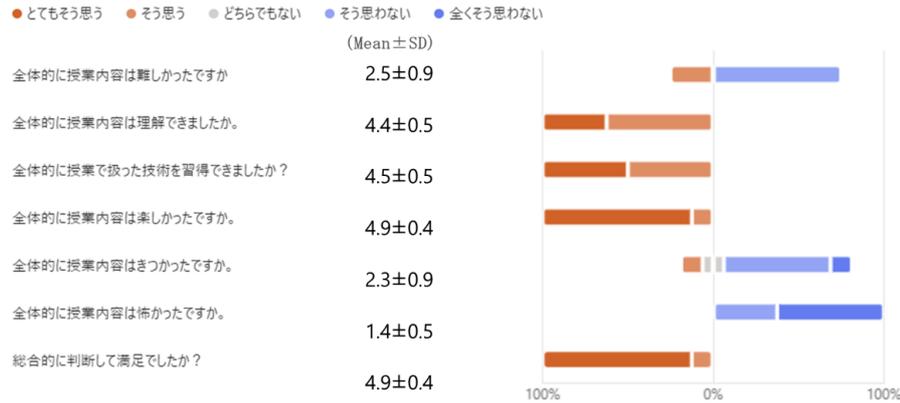


図4. 授業評価アンケート結果

推奨度調査の結果を図5に示した。

回答者8名のうち、6名が推奨者(9-10点)に分類され、中立者(7-8点)が1名、批判者(0-6点)が1名という結果となった。これにより算出されたNPS値は62となり、プログラムに対する高い推奨意向が示された。特に、全体の75%を占める推奨者の割合の高さは、本授業が受講生から強い支持を得ていることを示唆している。



図5. Net Promoter Score (NPS) による授業全体に対する推奨度調査

2.3 自由記述

自由記述からは、4つの主要な観点での意見が確認された。第一に、伝統文化との出会いに関する意見として、「サバニという沖縄の伝統的なパドルスポーツに取り組むことができた点が面白かった」という評価が得られた。第二に、実践的体験の価値に関する意見として、「なかなか出来ないとてもいい経験になりやってく良かった」との声が寄せられた。第三に、地域性に関する意見として、「沖縄ならではの学習ができてよかった」「沖縄の良さを知ることができる講義だと感じた」といった評価があった。第四に、プログラムの発展性に関する提案として、「サバニで無人島に行ったように、SUPでも試験で終わるのではなくて、少しレジャー的なものを入れてもよかった」「カヤックもやってみたかった」といった意見が見られた。

V. 考察

1. 実践結果の総括

本実践から、以下の三点が観察された。

第一に、授業内容に対する学生の反応として、高い理解度(4.4 ± 0.5)が示された。実習では限られた時間内で効率的に活動を進めることができ、学生は基礎知識をあらかじめ獲得した状態で実践に臨むことができた。

第二に、技術習得に関する結果として、高い技術習得度(4.5 ± 0.5)が示された。段階的な難易度となるように意図して授業設計を行ったが、学生は無理なく技術

を習得できたことが示唆された。

第三に、文化的理解に関する側面として、サバニ大工からの直接のレクチャーを含むプログラム構成が、学生の文化的理解を促進した可能性がある。自由記述における「沖縄の良さを知ることができる講義だと感じた」などのコメントは、学生が文化的側面にも関心を持ったことを示している。

2. 本実践の特徴分析

本実践の特徴は、主に三つの観点から分析することができる。第一に、反転授業の積極的な活用が挙げられる。オンライン教材を活用した効率的な事前学習により、実習時間を効果的に活用することが可能となった。また、学習者が自身の理解度に応じて学習を進められる環境を整えることで、より深い理解の促進につながった。

第二の特徴として、地域との密接な連携が挙げられる。地域の職人や指導者との協働により、伝統技術を直接学ぶ機会を確保することができた。この連携は、単なる技術伝承にとどまらず、地域文化への深い理解を促進する機会となった。

第三に、文化理解の重視が特徴として挙げられる。技術習得と文化理解を統合的に扱うことで、地域の文化的文脈における学習を実現した。これは、持続可能な文化継承への貢献という観点からも重要な意義を持つものである。

3. 課題点の分析

一方で、本実践を通じていくつかの重要な課題点も明らかになった。

第一に、難易度設定の問題が挙げられる。授業評価アンケートにおける難易度の評価(2.5 ± 0.9)は、プログラム全体がやや易しいレベルであったことを示唆している。今後のプログラム改善においては、より高度な技術課題を段階的に導入するとともに、チャレンジングな航程を設定することが求められる。また、気象条件の変化に対する対応力を育成するなど、より実践的な要素を取り入れていく必要がある。

第二に、教材開発の必要性が明確になった。現状では、シーカヤックやヨットの教材を一部転用している状況であり、この点での改善が急務である。具体的には、サバニに特化した技術解説教材の作成を進めるとともに、文化的背景に関する体系的な教材を開発する必要がある。さらに、安全管理に関する独自のマニュアルを整備することで、より専門的な教育内容の確立を目指す必

要がある。

第三に、天候への対応という課題が浮かび上がった。亜熱帯地域特有の気象条件を考慮すると、より綿密な対策が必要である。具体的には、詳細な天候判断基準を策定し、それに基づいた代替プログラムを充実させることが重要である。同時に、緊急時に備えた対応計画を整備することで、安全性の一層の向上を図る必要がある。

第四に、本実践の実施規模に関する限界がある。今回の実践は8名という少人数での実施であり、この人数はサバニという教材の特性上、安全管理や技術指導の観点からは適切であったものの、得られた知見の一般化可能性については慎重な検討が必要である。特に、授業評価の結果については、少人数であることによるバイアスの可能性を考慮する必要がある。また、受講生が全員4年次生であったことから、学年による学習効果の差異については検討できていない。より大規模な実践や、異なる学年での実施を通じて、本プログラムの教育効果をさらに検証していく必要がある。さらに、性別による学習効果の違いについても、今回の実践では男子6名、女子2名という偏りがあったため、十分な検討ができていない。今後は、より多様な属性の学生を対象とした実践を重ねることで、プログラムの有効性をより詳細に検証することが求められる。

4. 今後の発展可能性

本実践の今後の発展可能性として、教育効果のさらなる向上が期待される。具体的には、評価方法の精緻化を進め、より詳細な学習成果の測定を実現することが重要である。同時に、個別フィードバックの強化を図り、事後学習を充実させることで、学習効果の定着と深化を促進することができる。

さらに、他の海洋スポーツ関連授業や海洋スポーツ関連のピアサポート活動との連携を図りつつ、大学における地域貢献活動との連携を進めることで、大学4年間の学生の成長を見据えたより包括的な教育プログラムへと発展させることが可能である。これらの連携を通じて、本プログラムの教育的価値をより一層高めることが期待される。

VI. まとめと今後の展望

本実践を通じて、伝統文化である帆掛サバニを大学実技授業に導入する一つの方法を提示することができた。特に、事前学習と実地での技術習得を組み合わせたアプローチは、受講生の理解度と満足度において良好な結果をもたらした。また、地域の文化的資源を活用した教育実践として、PBEの概念を参照しながら授業設計を行った事例を報告することができた。

今後の課題としては、以下の三点に取り組む必要がある：

1. サバニに特化した専門的教材の開発
2. 適切な難易度設定への調整
3. 気象条件への柔軟な対応体制の整備

これらの課題に取り組みながら、本実践をさらに発展させることで、伝統文化の教育的活用の新たな可能性を追求していきたい。

VII. 引用文献

- 1) Bergmann J. and Sams A. (2012) Flip your classroom: reach every student in every class every day. International Society for Technology in Education.
- 2) Drucker-Ibanez, S., & Cáceres-Jensen, L. (2022). Integration of indigenous and local knowledge into sustainability education: A systematic literature review. *Environmental Education Research*, 28(8).
- 3) 土方圭・張本文昭・井上真理子 (2024) 野外教育学の探究:実践の礎となる理論をめぐる14章. 杏林書院.
- 4) 前田和司 (2016) 「場所に感応する野外教育」は何を目指すのか: 「地域に根ざした野外教育」の理論化を見ずえて. *野外教育研究*, 19(2): 1-13.
- 5) Riggs, E. M. (2004). Field-based education and indigenous knowledge: Essential components of geoscience education for native American communities. *Science Education*, 89(2).
- 6) Smith, G. A., & Gruenewald, D. A. (2008). Place-based education in the global age. Lawrence Erlbaum Associates.
- 7) 千足耕一・蓬郷尚代 (2021) 帆掛けサバニの現代的な意義に関する事例研究—サバニ帆漕レース参加者に対する調査の質的分析. *沿岸域学会誌*, 33(4).
- 8) 蓬郷尚代 (2023) シリアス・レジャーの特徴を持つ海洋スポーツイベントに関する研究: 慶良間海峡横断サバニ帆漕レースの参加者を対象とした調査. *体育研究*, 57: 13-23.
- 9) Whyte, K. (2015). What do indigenous knowledges do for indigenous peoples? In *Traditional Ecological Knowledge* (pp. 57-82). Cambridge University Press.



本稿は、Creative Commons ライセンス
BY/Attribution (表示) -SA/Share-alike (継承)
4.0 国際 (CC BY-SA 4.0) の下に公開されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

□CASE REPORT□

A Practice Report on University Physical Education Classes Utilizing Traditional Sailing Sabani BoatsTOHYA Hidenori¹, ISHIBASHI Yukimasa¹.¹ Meio University*Jpn. J. Marit. Activity*, 13(3):67-72, 2025.

(Submitted : 28 February, 2025; accepted in final form: 28 March, 2025)

【Abstract】

This study reports on the implementation of university physical education classes utilizing the Sabani, a traditional wooden sailing boat from Okinawa. The course offered as a specialized subject at Meio University, employed a flipped classroom approach combining online pre-learning materials, practical skill acquisition through field training, community interaction, and post-learning reflection. Analysis through course evaluation questionnaires and Net Promoter Score (NPS) revealed high overall satisfaction (4.9 ± 0.4), along with favorable results in skill acquisition (4.5 ± 0.5) and comprehension (4.4 ± 0.5). The NPS value of 62 indicated strong program endorsement. Qualitative feedback highlighted positive evaluations regarding encounters with traditional culture, the value of practical experience, and regional characteristics. However, challenges were identified in areas such as difficulty level adjustment, weather response protocols, and the need for specialized teaching materials. This practice report presents a case study of incorporating traditional cultural elements into university physical education courses, demonstrating an approach that references the concepts of Place-Based Education (PBE). The findings contribute to the growing body of knowledge on integrating cultural heritage into higher education physical education programs while promoting sustainable cultural preservation through educational practices.

Corresponding Author: TOHYA Hidenori, e-mail : h.tohya@meio-u.ac.jp

□第13回日本海洋人間学会大会 基調講演 講演録□

「海洋スポーツによる地域振興」

講師：合志明倫（株）gosea's 代表取締役、東海大学海洋学部 客員准教授）
司会：平野 貴也（一般社団法人 レジャースポーツ研究所）

海洋人間学雑誌, 13(3):73-84, 2025.

キーワード：海洋スポーツ, 地域振興.

（平野：司会）

基調講演を始めていきたくと思います。私は司会のレジャースポーツ研究所の平野貴也と申します。よろしくお願ひします。今回は、合志先生にお話を頂きませんが、合志先生はプロウインドサーファーでもあられます。私は大学生の頃大会に出ておりましたが、ちょうど僕が大学院生ですか、すごく速い大学生がいるのをプロのウインドサーフィンの大会で見えています。その頃から知り合いなんですけれども、彼はずっとトップランナーを走り続けております。私自身も実はこの4月から自分で事業を始めていますけど、1つのお店をやっただけでもすごく大変なんですね。合志先生の場合は、大学の教員で、ショップのオーナーでもあります。そして、レストランを営まれ、宿泊施設も持たれて、いくつもの草鞋を履きながら、地域貢献ですとかいろいろなこと取り組まれています。その活動内容やコツとか、どういう風に地域活動しているのかのポイントをお話し頂けると思っております。よろしくお願ひします。

先生のご発表の後に少し質疑応答、ディスカッションをしていきたくと思います。皆さん是非とも、どうぞよろしくお願ひ致します。予定3時半までですがスタートが5分遅れなので35分ぐらいまでこのセッションの時間とします。

合志先生よろしくお願ひ致します。

（鉄：実行委員長）

皆さんすみません。今日、この基調講演に先立ちまして、静岡市長の難波さんから、祝辞をいただいておりますので、祝辞を代読の方を宮城島市議の方からして頂きたいと思ひます。よろしくお願ひ致します。

（宮城島：静岡市議会議員）

皆さん、こんにちは。難波市長は、本当はこちらの方に行きたいということで、非常に熱望をしたんですが、どうしても公務と重なりまして、私が代読させて頂きます。私も実は東海大の海洋学部海洋土木出身です。非常に縁があり非常に懐かしいなと思ひています。私のときはこの校舎はなかったんですが富士山が見えて素晴らしいと思ひます。では早速、難波市長から預かって参りましたので代読させて頂きます。

第13回日本海洋人間学会大会のご盛會を心よりお喜びお慶び申し上げます。この静岡の地で、多くの海洋研究者や日本の海の未来を担う高校生の皆様が、研究成果や取り組み事例を2日間にわたり発表されると伺っております。皆様ようこそ静岡にお越しくださいませ

た。静岡市では、清水港を世界的な海洋拠点にしようと挑戦を進めています。日本はEEZと領海を合わせた面積は世界第8位の大国です。海洋研究は、これからの日本の国力を担う最も重要な分野の一つであり、産官学が連携し、日本の未来のために国家として進めていく必要があるものだと私は認識をしています。皆様の取り組みが日本の未来をつくると言っても過言ではありません。近い将来、静岡市に誕生する海洋研究拠点で駿河湾を舞台に、皆様がさらに専門性を高めた研究を進めてくださる日が来ることを心より願っております。

本日は公務のため出席が叶わずとても残念です。発表概要を後日、改めてお聞かせ頂きたいと存じます。本大会のご盛會と、益々のご発展を心よりご祈念申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。本日は誠にありがとうございます。静岡市長、難波喬司 代読 宮城島文人 本日はおめでとうございませう。

（鉄：実行委員長）

宮城島さんどうもありがとうございました。それでは基調講演をお願い致します。

（平野：司会）

改めましてもう一度スタートですね。それでは、合志先生、よろしくお願ひします。

（合志）

はい、皆様こんにちは。ご紹介預かりました合志と申します。本日は貴重なお時間を頂きまして、このような会に御招きを頂きましたことを厚く御礼申し上げます。早速ですが始めさせて頂きたいと思ひます。今日は、海洋スポーツから地域振興を考えるというテーマで、地元民にとって、愛される海洋に、水辺を目指してということで少しお話をさせて頂きます。

改めまして、合志明倫と申します。自分でパワーポイントを作るのに、どの写真にしようかなと選びながら作るのですが、決してナルシストではございませんが、現役のウインドサーファーで大学准教授という立場で、そして日本でもプロウインドサーファーとして活躍をさせて頂いているという立場で活動している人間というのは世界を見てもあまり類を見ないのかなってということで、平野先生どうですかね？あまりないですよ。

<平野：司会>

はい。

<合志>

また、北京オリンピックの代表候補にも選ばれましたが、出場はかないませんでした。そういった活動をして参りました。また32年間、この海洋学部卒業なので地元で育てて頂きました。地元の皆さんと熱い絆を結んでいると思っております。

ウインドサーフィン、スラロームという競技ですけど、私はスピードを出す種目を中心にやっています。これは2年前ぐらいの奄美大島で開催された1シーンですけど、先頭を走っているわけです。この黒いセールなんですけども、どういう競技をしているかという、スピードでいうと大体、時速60キロ、速い時は70キロぐらいのスピードが出ます。これはあまり風が強いわけではないのですけれども、対岸に伊豆半島がちょうど見えています。大体25キロぐらいありますので、時速60キロぐらいで行くと30分ぐらいで着きますが、行ったはいいけど風がなくなると帰ってこれなくなります。それぐらいで行けるスピードが出ます。ウインドサーフィンを見たことある方いらっしゃるでしょうか。ありがとうございます。やはり海洋人間学会ということで皆さんこういった種目にはすごく長けていらっしゃるのかなと思いますけど、このスピードで、波をジャンプするとこの校舎よりも高くジャンプをするぐらい跳び上がります。



JWA プロツアー2022奄美大島大会シーン

このような海洋スポーツは、今、様々な分野で研究が進んでいます。そして、これから動画が流れますけど、僕らが今やってる種目はこのフィンがボードの裏に付いているタイプと最近主流の水中翼というボードに羽が付いている、水中翼のフォイルが流行り始めています。そのフォイルが大きく進化すると、サーフィンを皆さんよくご存知だと思いますが、うねりに、どんどん、どんどん乗っていただけます。実は、海外ではこのような研究が既に進んでいます。例えばハワイに到達する波は、北海道からノースショアへ到達するわけで、1つのうねりにもし乗れたとしたら、北海道からハワイに動力なしで行ける時代が来るのかもしれませんが。海洋スポーツ1つにしても、海外ではアメリカズカップも含めて進化しています。ぜひ、海洋人間学会のプロフェッショナルの皆さんの中で、日本でも研究を進めて頂き、新しいコンテンツができることを祈っております。

今日は基調講演と言いましても、すごいエビデンスを持ってきたり、具体的な数字を持ってきたり、何か難しい話を持ってきてるわけではなく、ぜひ今日ここに

にお越しの皆さんは、きっと海に対して思いが熱い方だと思います。まずこの皆さんで、今後の日本の沿岸線そして海洋効果、海洋立国日本の海を変えていくという、新たなステージにして頂けたらという思いでお話をさせて頂ければと思います。

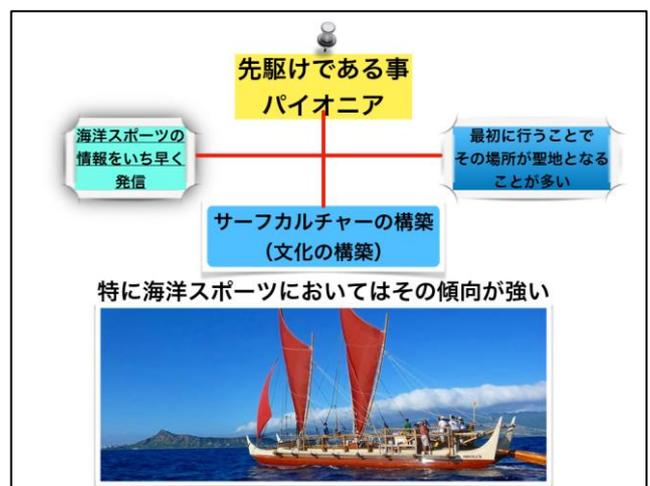
自分自慢ではありませんが、ここ数年でいろいろな事業や大学の授業を10数年やらせて頂きましたが、最近では授業ではなく事業の方をいくつかやらせて頂いています。例えば、静岡銀行が主催する100何社が応募する静銀起業家大賞で、私達のビジネスモデルや今後の展望に対して特別賞をいただいています。右上は、鉄先生や皆さんと海底にお酒を沈めた海底熟成酒ですとか、NHKで取材していただいたときの方ですけども、あと静岡のビジネスレポートですとか、様々なジャンルで取り上げて頂き、何とかやらせて頂いている状態です。プロウインドサーファーと会社と客員准教授という名前をいただいています、会社は三保半島先端でございます。

今日は各地からお見えということなので、簡単に説明させていただくと三保半島は鉤爪のようになり、清水港湾外と大きく分けて外海と内海という2つに分かれています。外海の方は波が結構あります。弊社の本社は内海側で波が静かでほとんど湖のような場所で、非常に静穏な海域、そういった場所にあります。皆さんがいるのは海洋学部、この下の場所です。そして先ほどお話しした通り、新たな海洋文化の構築、ぜひ海洋人間学会という、皆さん、パッションをお持ちの皆さんで新しいステージに進んで頂けたらと思っています。

先駆けへのターニングポイント、これはまさに今だと思いますが、海洋スポーツ、あるいは海洋における文化のスタートは、やはり先駆けであること、例えば、江ノ島がヨットで非常に有名な場所ですよね。小林先生どうですか。

(小林)
そうですか…。

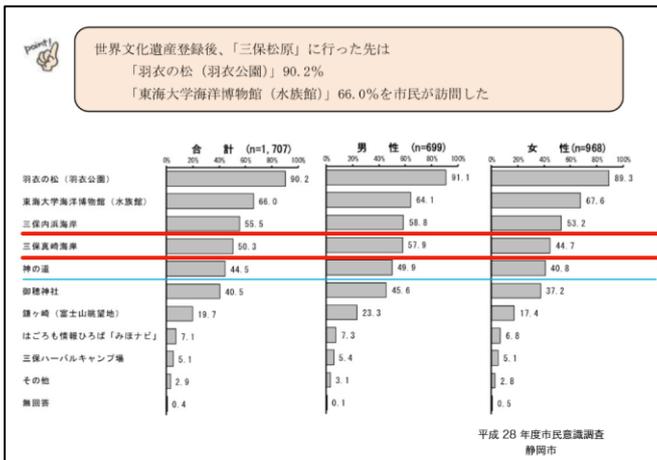
(合志)
今日は「そうですね」と言ってください。それは、なぜかと言うと、やはり東京オリンピックのときに、あそこで、前回、前々回、東京オリンピックの会場になった



とか、あるいは千葉の一宮がサーフタウンとして、オリンピックの会場になりました。そこがなぜオリンピックの会場に選ばれたかという、最初にサーフィンの大会が開かれた場所であり、最初にいち早くやった場所がその文化の構築、そのパイオニアになることが多いと言われています。松本先生、間違いありませんか。

(松本)
はい。

(合志)
ありがとうございます。特に海洋スポーツにおいてはその傾向が非常に強いので、まずはこれを先にお伝えしておきたいなと思います。ちょっと話は変わります。皆さんがいる三保は、ご存知の通り世界文化遺産の名勝地で非常に風光明媚な場所です。ちょうどこれは学校の中から見たところです。そんな世界文化遺産は10年前に登録をされ…市民の憩いの場になっているかは、ちょっと僕の中で疑問なんですけれども…。ちょっとデータは古いのですが、市民の皆さんがどこに行ってるかという、世界文化遺産には行きましたが、他にどこに行ったかという、次に多かったのは、本学が運営していた海洋科学博物館、3・4番目に多い場所は、先ほどご紹介した内海海岸なんですね。ですから内海海岸は、静岡市の人にとって訪ねる場所として多くの方が足を運んでいる、このようなデータが静岡市にはあります。



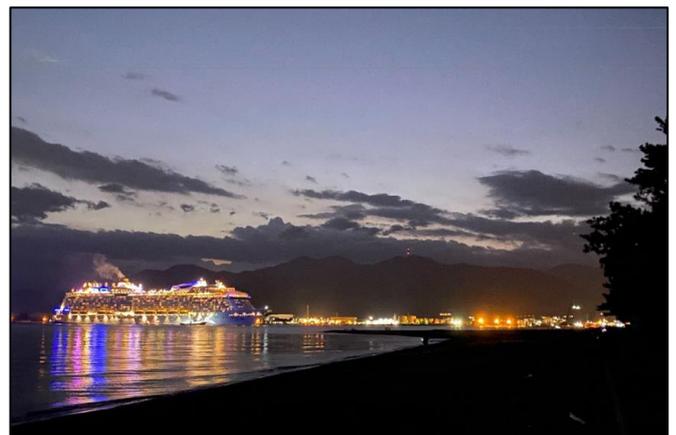
さて、このように静岡を中心にお話させて頂きますが、今後の水辺をどのように変えていくのか、どう創造していくのか、私の最近の実働を踏まえご紹介をさせて頂ければと思います。まず、この自慢ですけども、皆さん、各エリアでいろいろな所をご存知だと思いますが、私が三保で一番好きな場所はこういった光景なんですね。

富士山は見えます。確かに、東側に富士山や三保の松原は、もう既に僕から見るとキラコンテツで、誰でも知っていますし、見えたら非常に綺麗だなと思うんですが、実は皆さん、自分はいいなと思っているんですが、相手の方はあまり知らない場所がたくさんあると思います。これが内浜から見た夕日の写真です。三保半島は外海と内海で東と西にわかれ、西側は非常に綺麗に見える場所がございます。静岡県 506 キロ沿岸線があります。その 506 キロ沿岸線がある中で、夕日がこの



ように進んでいくのが見える場所は、浜名湖の東海岸と遠州灘、そして、三保、西伊豆、南伊豆しかないですね。ですから 506 キロ沿岸線があっても、この夕日が落ちる場所は非常に貴重です。そして本学の体育の授業、このような中で授業があり、単位がもらえる…という言い方をしてはいけません。非常に良い経験をして、実働し素晴らしい体験ができる。それは、大学から大体自転車で 10 分~15 分ぐらいの場所がございます。昼間は、平水を保っていますので、このように SUP やいろいろなレクリエーションが楽しめる場所になっております。

内海側は西側を向いていますが、少し海に出ると、このように富士山が綺麗に見える場所になります。海から逆に富士山を見るとまた違う所に来た、そんな素晴らしいエリアになります。ちょっと地元自慢ですけども、私が好きなのは、もう 1 つ夕日が落ちた後なんです。これも各エリアで見れると思うんですが、夕日が落ちた後のグラデーションが非常に綺麗に見える場所があります。そして、例えば太平洋では夜になると真っ暗で何も見えませんが、ここ清水港はほどよい夜景があります。このような夜景も見れますし、最近では客船が入港しますので、客船が入るとこのように見えて、本当、マイアミのようなビューが、この三保半島の先端から見られる場所になっております。



そして、また自分自慢じゃないですけども、三保半島、駿河湾には 2500m という深い海があります。そして、その内側には、水深は浅くはないですが、非常に小魚が豊富でその小魚、ベイトを追って、こういった大きなお魚、これはブリですけども、これ 10Kg ありました。本当に海岸から約 10m ぐらいですかね。その場に SUP で

行って、ひゅんといってひゅんと釣れるという感じです。本当ですよ、SUPが変な滑稽な動きをしてるんですよ。滑稽な動きをして、あの人は何をしているのだ？と思うと魚が釣れてるんですね。そういう本当に近くで大きなブリが釣れるような場所ですね。なぜ、小魚がたくさんいるのかは鉄先生が今研究されてるみたいなので、大発表があるかもしれませんね。はい。あと、ヒラメも大きいのが、これが84cmね、そういった魚が釣れます。スズキも本当に大きい。特に、この清水で取れる魚は大きいです。ぜひチャレンジしてみてください。

その清水港ですけれども、最近非常に注目をされている理由の1つとしては、名古屋、東京から均等な距離で約1時間～2時間、ちょうど中心地ですね。そして、山梨、長野から道路が繋がりましたので、非常にここ近くなりました。ですから、海なし県という言い方をしたら失礼なのかもしれませんが、山梨と長野からも本当に早くこの海に出ることができるようになったことで非常に注目されている港であります。

そして、いろいろな所、海外も行きましたけれども、清水港、三保半島がなぜいいかということをし少し並べてみました。本当にたくさんの海洋スポーツがこの三保半島の内浜で行われています。ここに書かれている以上にもっと行われていると思いますが、なぜそういうポテンシャルがあるのかと言いますと、堤防は非常に低いですが、内浜、実は津波が来ると言われていますが、非常に堤防が低いというか堤防の周りに砂が溜まって、ほぼ平らに見えあまり境がありません。そして大体ビーチは、国道や県道が入って、なかなかビーチダイレクトの場所は少ないです。湘南、すごくマリンスポーツが盛んですけど、実際には、やはり幹線道路が入ります。三保は道路がないことで非常にアクセスがいい。そして電線がない。その非常に何て言いますか、海外ライクな環境がそこに広がっているわけです。先ほど言ったように鉤爪になってますので、少し流されても安全を保てる場所になります。そして、三保半島を後で、もし時間があったら見て頂きたいのですが、実は全方位砂です。ですから全部ビーチです。岩場がほとんどない。一部ちょっとテトラとなっていますけれど、全部ビーチなのでどこからでも出ようと思えば、出ることが可能です。そして冬でも温暖です。実は、今日東京から帰ってきたんです。新幹線が1時間10分遅れてギリギリセーフで間に合いましたが、降りた瞬間、静岡は暖かかったです。なぜかという、ここは両サイドが海に囲まれて、水温が冬でも14度以下にならないから両サイドは暖房のようで非常に温暖なところなんです。同じ静岡県でも、浜松や山梨、本栖湖あたりからマリンスポーツを楽しまれに来ると、暖かい場所になります。

そして、最後、補足で入れてありますが、海洋スポーツ、マリンスポーツを行った学生が、静岡県に永住、定住する、要は就職する子たちが非常に多いんです。ですから、これは非常に先ほど難波さん、難波市長のコメントにもありましたけれども、若い世代を、この静岡県に留めたいと思うならば、海洋スポーツをやらせたら残る可能性も非常に高まるのではないかなと思います。なぜかと言うとやはり、海がいい、静岡県の海がいい、小林先生も湘南の海はいいですけども、やはり静岡県の海がいいと言ってくれますね。

(小林)
はい。

無理やりでしたが、そういう意味で非常に良い海がここにあるということはそういうことからわかるのかなと思います。あとは、この辺でも珍しい魚もいて、

静岡県の沿岸線は506km!



IRON@facebook TAKEUCHI

静岡市近隣を利用している海洋スポーツ

SUP・ヨット・ウインドサーフィン・カイトサーフィン
水上バイク・フィッシング・ウエイクボード・
アウトリガーカヌー・トラリアスロン・海水浴
ウイングサーフィン・ダイビングなど

年間、海洋スポーツ数十万人利用

静岡（日本は）国内有数のマリンスポーツのメッカとなりえるポテンシャルがある

- ・堤防も景観や利用者に良い高さである
- ・ビーチとの間に国道や道路がない
- ・安全な環境（内海側は鉤爪型地形により外海の影響を受け難い）
- ・特異な地形を活かした開発（全方位がビーチ）
- ・冬でも温暖
- ・都市部に近いなど（三保の場合）

"ミホノハゴロモ"のような珍しい魚も多く存在

海洋スポーツを行った多くの学生は静岡へ就職など定住を選択

ミホノハゴロモという魚の新種がまだまだ見つかっているようです。そういった生物学的にもまだまだ未開拓な部分があるのかなと思います。

さあ、そんな三保半島のいいことばかり言ってきましたが、かつてはいいところでした。今もいいところになってきていると思います。東海大学は、三保が建学の地であります。湘南校舎も北海道も九州もありますけれど、ここが建学の地です。そして当時は、海洋科学博物館、そして恐竜館、人体博物館などなど、いわゆる三保文化ランドという、アカデミックとはいえ、松前先生はリゾートライクな場所を形成されてきた。そして、流れるプールも当時ありました。宮城嶋さんは、流れるプール行かれましたね。運営されてましたね。非常に夏はたくさんのお客様がこの三保半島にお見えになっていた。プールの時間が終わると、もう三保街道が渋滞するぐらいそういった場所でした。かつて70万人以上の方がこの場所を訪れ地元の方に非常に愛された場所で、私も何回か行きました。しかし、ニュースでご存知の方もいらっしゃると思うんですが、10月に全ての観覧といいますが、来場者も一切受け付けない、海洋科学博物館は閉鎖という方向性に向かっているところなんです。1970年代からこの三保半島に、遊んで学べる施設として、親しまれてきた、総来場者数はもう1900万人を超える場所でしたが、残念ながら今はちょっとなんでしょうね、シュリンクの方向に向かっているのかなということで、今後どうなのか注目したいところです。そういったアクションに今はなっております。

そして、いいところばかり言ってきましたが、やはり観光というテーマで言うと、海の近くのホテルですね。三保にあります、左側は大学が持っていた三保研修館、これも閉鎖しました。そして三保園ホテルという大きなホテルも閉鎖しました。かつて、この三保園ホテルというホテルには大洋ホエールズとか、野球のキャンプが来るぐらい多くの人で賑わったホテルなんですけども、このホテルも閉鎖しました。あと地元の旅館とか、右下のシーサイドホテル福田、今は私達が運営してい

ますが、こういったホテルもどんどん倒産や閉鎖をし、なくなっているというのが三保半島の現状です。そして52年目を迎えた三保文化ランドができてからの話です。文化ランドができて52年目を迎えた当時、非常に陸上だけでなく、ヨットですとか、ウインドサーフィンですとかいろいろなことが盛り上がった時代がありました。しかし、世界文化遺産の裏側で、世界文化遺産素晴らしいでしょう、綺麗でしょうと言っても、裏に行くところのような状態になっている。これをあまり言うと、静岡県の方が嬉しい顔しません、こういう状態です。全国的にもやはりこういう場所が非常に多いと聞いてます。今後こういった場所をどう再構築していくのが課題になるのかなと思っております。

**52年目を迎えた同エリア施設は廃墟化
賑わいのあった海の家は使用されなくなり
マリクラフトなども散乱している状態であった**

全国的にもこのような場所は多い



そんな今ですね、だんだん、いろいろな部分でシュリンクをしている場所なんですけれども、その内浜には清水駅から渡し船が出てます。水上バスの栈橋があります。その栈橋には年間、5万人が6万人の皆さんがそこで乗り降りをしてるんですけども、いわゆるリゾート地はもうなくなっているのですが、世界文化遺産に行ってみようという、その動線が残っていて、たくさんの方が清水駅から水上バスで渡って来られるんです。下船場所、降りた場所がどうなっているかという、このような状態でした。降りた場所は、ちょっと見にくいかもしれませんが、冷蔵庫ですとか、いわゆる産廃ですよ。それから汚い海の絵が両サイドにあって、これが世界文化遺産に行くと清水駅から渡ってきた人が最初に見る光景でした。ここで6万人の方が行ったり来たりされたわけです。明らかにこれはポジティブキャンペーンではないですよ。もう完全にネガティブです。もう2度と来たくない。そういった場所でした。トイレもないですし、雨宿りする場所もないです。こういった場所が本当に2・3年前までこういう状態でした。こういったものが散乱をしている。そして、かつて賑わった海の家、いろいろな所で繁栄した時代があったと思うんですが、草はボーボーで、もう使われなくなった海の家がたくさん建ち並んでいる、そういった場所でありました。



さあ、そんな中で、本当にいい場所だと思ってきたんですけども、これは静岡だけではないと思うんですが、やはり皆さんでやりましょうと言ってもやらない、言われるけどできない。その時期、新型コロナが蔓延をして、なかなか動き出せなかった事態が数年前にありましたけれども、私はやはりいい場所というのを知ってましたので、誰もやらないのであれば、自分が動くしかないと思い、銀行さん側も、あなたアホなのですかとぐらいの感じで言われました。だってコロナのときに、飲食業とホテルですよ。これ駄目なツートップですよ。それをやりたいんだと言ったときに、いやそれに対してちょっとご一緒できないですねと回答であったんですけど、やはり全てのターニングポイントは今だと考えて、2020年に小さなサーフショップがあったんですけど、法人化をしてプロジェクトを始動したのが現状です。

我々のプロジェクトがスタートしてどんなことが動き出したのかというのを少しご紹介しますが、元々左側にあったのはサーフショップで「gosea's surf」という、私の名前が合志という名前なので、ベタですけど、いろいろな海に行こうということでゴーシーズ、そういったサーフショップを元々運営していますけど大体ここで売り上げ2800万ぐらいありました。そのサーフショップでは、子供たちのマリネ事業を今やってるんですけども、2021年に、先ほど右下にありますシーサイドホテル福田屋というのが三保にありました。これが倒産をしまして、誰か何かやらないのかなという思いでいたところにお話をいただいたんで、今そこは、購入はしてはしませんがお借りをして、コロナのときは総運営4200名ぐらいでしたが3500名ぐらいしか来なくて、これはちょっとまずいかなと思いついてはいました。令和4年、令和5年、そして今年は大体6300名以上を児童の皆さんや、あるいは合宿ですね、皆さんが来て頂いていると、大体年間で6000万ぐらいになっております。

そして真ん中のホテルを実は購入したかったんですけど、購入できなかったんで、そこに投資する資本がいなかったんで、何か他のことをしたいなということで、先ほどお見せした栈橋の前に、この一番右側にある「Ulalena」というレストランを建設しました。大体ここで1億6000万ぐらいかかってますけども、宿泊施設を備えた、カジュアルフレンチのレストランを今運営しております。ランチタイムはですね、おかげさまで、地元のマダムたち本当にご利用いただいております。大体日中は、満席をいただいております。シェフは「フレンチ三国」の出身のシェフですね。自分で言うのもなんですけど、非常に美味しいですので、ぜひまたお越し頂ければと思います。

それを作るにあたって何をしたかという、先ほどお見せした、海の家ですね。やはりちょっとビジュアル的に良くない。この海の家先代の先生方も、やはり撤去したいということでいろいろな知恵を働かせてアクションしたらしいんですが、やはり解体できなかったそうです。ですが、アフターコロナでやはりパッションを持って、今後のビジョンを訴えて、地元の方と密に接して話をしたところ、全部解体に向かって、県もそうですし、市もそうですし、一緒になって動いてくれて、全て解体に向かって動き始めたのが大体2年半3年前ですかね。

アクションがどんどん出てきました。草もボーボーだったので、県の職員にもこうやって刈って頂きましたし、私も草刈り機で来る日も来る日も、この草刈り機を3台壊しましたね。行ったり来たり、行ったり来たりして、地元開発をして、草を刈って、雑草も、ちゃんとした芝刈り機で刈ると芝生のように見えるんですよ。非常に綺麗になりました。

そういった活動を見て、地元の海洋土木系の会社の皆さんですとか、右側の東海大翔洋の皆さんですとか、あるいは、辻尾さんとかです、エスパルスさんとか、あとは地元の皆さんとか、いろいろな人たちがだんだん、世界文化遺産の外側だけではなくて、内側にも目を向けてくださるようになり、清掃活動がどんどん始まってきました。そして、草ボーボーだったところで、なんと、このように子供たちの海洋教育ができなかった場所で、少しずつ育っているのが現状です。さっき草ボーボーだったところで海の家があったところにレストランが今ある。ここに置いてあるカヌーは、湘南アウトリガーのカヌーも置かせていただいています。オブジェじゃなくてちゃんと乗らなくてはですね。非常に美しい場所として運営をさせていただいております。今日は、懇親会も参加される方はここで楽しみ頂けます。楽しみにして頂けたらと思います。



その、Ulalena ができたことによって、どういうことが始まったかということ、こんな感じになってます。右側がちょっとラグジュアリーなお部屋ですし、100平米ちょっとありますね。左側レストランから見える夕日ですけども、こういった形で地元の小学生が社会科見学に来てくれるようになったんですね。今日、小曾根先生も来ていただいておりますけども、小曾根先生も中学校で来ていただいたりしておりますが、子供たちが、ここは一体何なんだと、すごく興味を持って地元の子たちが来てくれるようになったんです。僕は飲むことがすごく好きなんです。

実は、Ulalena を作った理由はですね、夕日を見ながら一杯飲める場所が欲しかったということで、清水港に全然なかったんですね。やはりそれも「やってほしい」と言っても誰もやってくれなかったんで、その飲める場所ということで、団塊世代の皆さんもクラブとかで、クラブといいますかディスコです。そういうのが流行った時代であったかと思えますから、やはり大人が空間を作りたいなということで、今日も、何かク



ラブのメンバーじゃないですけど、メンバーが来てくれます。こういった楽しめる空間をあんな先端に作って大丈夫かなと思うんですけど、皆さん来てくださるんですよ。そして、こういった空間ができた。

あとですね、ビーチを使って、静岡市はカンヌ市、フランスのカヌ市と姉妹都市を提携していますので、カンヌウィークというのがあります。カンヌ映画祭をやっているときに、静岡市でも映画祭を行うんですが、ビーチで映画を見ようということで、2年前からこのカンヌウィークを使ってビーチで映画を鑑賞するという試みもできました。ビーチに地元の方が800人~900人、押しかけて、三保の夕日の中で、この日はトップガンマーベリックでしたね。本当に皆さん最後まで、最後にあのトップガンのテーマが流れると拍手をするという、そんな感じ。非常に一体感がある、そういった映画会でした。そういったこともビーチで行われるようになってます。ぱっと見たらこれ鉄先生ですね。これいいところで見てますね。こういった映画祭も行われるようになりました。非常にいい雰囲気、何か映画祭って何でしょうね、みんなかっこつけるのかわからないけど、必ずフルボトルで持っていきます。フルボトルで買ってくれる。グラスワインじゃないですよ。フルボトルだから、みんなすごく飲んでくださる、そういったイベントです。



そしてこの夏、9月でしたかね、10月ですね。海辺のマルシェということで、マルシェをいくつか行ってきたんですけども、地元の方、ローカルを中心に海辺のマルシェ、これね、お山でマルシェっていうのが元々行われていて、そのお山でマルシェは、やはり2000人~3000人を動員するようなマルシェだったんです。今度、



海でやりましょうというお声をいただいて、10月にこの海辺のマルシェを開催していただいたんです。このとき5000人ぐらいきたんです。ちょっとすいません、マイクいいですか。あの、この海辺のマルシェはですね、やっていただいた感想と今後、僕らはやはりこれを機に、フェスぐらいにしていきたいなと思っていますけど。藤ヶ谷さんが来てくれているので、非常に有能な企画プロデューサーですから、ちょっと一言、何か素晴らしいイベントをしていただいております。

(藤ヶ谷)

すみません、座ったままで失礼します。藤ヶ谷です。僕らが言ってきたように、ヤマセミの湯でイベントを何度かやらせていただいている、そこで清水を盛り上げようとか、山の中を盛り上げようという意図で始めさせていただいて、清水といえばやはり山と海、海も絡めてやろうかっていうことで、今回、合志先生に協力いただいてやった次第でございます。

(合志)

はい。ありがとうございます。非常に地元の、私はやはり32年いても、やはりよそ者なんです。地元とのリレーションがあったとしても、やはりよそものです。ですから、やはり彼らのようなら、地元の方がやはり加わって一緒にやることによって、これだけ多くの方が来ることをこの10月に改めて実感しました。本当にいい顔してました皆さん。そして、またびっくり仰天だったんですけど、三保のあのビーチで「結婚式を挙げたいです」という人たちが増えてきたんです。宣材写真の撮影は、富士山バックに行っていたんですけど、レストランが1個出来たことだけによって、ビーチで結婚式を挙げてくださる方が、今年も5組ぐらいいらっしゃいます。そういう場所にだんだんできてきているんだということも実感をしています。うちのシェフが、バーベキューグリルでお客様をもてなしたいということで、やはりウォーターフロントということで、湘南の中だと普通のスタイルなのかもしれませんが、この三保ではまた新たなスタイルとして今、構築されているというのが現状です。

ここまでエンターテイメント的なものを見てもいいんですけど、アカデミック的はどうなのかといったときには、リアルですね、カヌー教室といいますか、海の体験授業ですよね。大体八王子、それから横浜ですね

どなどから、関東方面から子供たちが多くやってきてくれます。リアルなこういった体験を行うんですが、非常にやはり子供たちの笑顔が、「こんな笑顔見たことないですよ」という先生が多いですね。本当、まさにこれは顔出しOKということで、今いただいている写真ですけども、非常にアクティブに皆さん楽しまれて、いろいろなことを学んで、怖いことも学んでいく、そういった事業といいますか、教育体験事業を行わせていただいております。また、ビーチコーミングも各地で行われていると思うんですけども、SUP体験ですとか、アカデミックな立場でいろいろやっていますが、1/4という数字があります。1/4、これ何かわかりますかね、1/4、平野先生、何かわかりますか、1/4って？

(平野：司会)

今年海に行った人。

(合志)

なるほど。近いですね。近いです。実は1/4の子たちは海が初めてだったんです。ほとんどの学校に聞きました。今日海が初めてです。要は海が初めてというのは、塩水が初めてなんです。頭の中で塩水は知っていても、初めてその日に舐めたんです。ちょっと初めて海が三保の海でごめんという思いと、よかったねという思いが半々ではあったんですけども、1/4というデータがあります。

今年の夏開催した、TS小学校3年生4年生における海体験授業データ

今年の夏に海に行きましたか？	はい	いいえ		
	164	155		
海に入るのが今回のマリンスポーツではじめてでしたか？	はじめて	2回目	それ以上	
	91	55	164	
マリンスポーツはどうでしたか？	とても楽しかった	楽しかった	あまり楽しくなかった	楽しくなかった
	129	73	9	9

海に入ったことが初めての児童
91/310人

お手元に資料をお配りしたので、また、参考資料に使うて頂ければと思いますけど、これはTSと書いてあるからすぐわかってしまうかと思いますが、東海大翔洋の小学校に今年取らせてもらったアンケートですが、310人中91人がこれだけ近くにいっても海が初めてです。なぜこの数字がわかったかという、今年、彼らは3年生4年生の体育の授業を海でやりました。要はプールの授業をやめてと言いますかプールがなくなりましたので、そのプールの授業を海に差し替えて、3年生4年生は海で授業を行いました。それはまた詳しくお話できればと思いますが、海に入れるという体験、エビデンスが得られるということもありますが、実際にやはり小学校のプール維持費、そういったものが非常に負担になっている。それから、老朽化をしている。そういった部分で翔洋の小学校の体育の先生とお話をしまして、その先生が非常にやはり最初のハードルは高いと

思います、頑張ってくれて、海で子供たちの体育の授業を行うことができたのです。本当 310 名の皆さん、310 名ですが、何回にも分けて延べ回数で言うと、かなりの人数をやったことになります。海に入った子たちがこれだけいるっていうのが、今の世代の現状ということをご存知おき頂ければと思います。

1 人だけですね、高校生の授業やったことあるんですが、静岡の高校生でしたけど、海を見たことが初めてという子が 1 人だけいました。静岡の高校です。「僕、海に来て、海を見たのが初めてです。」入ったことじゃなくて、見たのは初めて。そういう世代、あるいは、そういう時代なんだなっていうことを、非常に感慨深く感じた内容でありました。今の内容はですね、この体育の授業という、こういった冊子になって販売されているようですから、ぜひこの今回の海での実習の内容が書かれていますので、ぜひご興味ある方は研究費等々ですね、お買い求め頂ければというふうに思います。

アカデミックだけでなくイベントとしては、継続をしていたウインドサーフィンのイベントですとか、ジュニア、子供たちですね。このジュニアからは本当に世界に羽ばたく選手が三保からたくさん出ています。このジュニアウインドサーフィン選手権というものを、この三保が聖地というふうに名づけていただいて、毎年夏に皆さんやってきていただく、そういった大会になってきております。それから、SUP で言うと、三保カップという大会をやります。SUP の選手は 100~150 名ぐらい、取り巻きを入れると 500 名ぐらい、1 つの大会に集まる。真夏の本当、灼熱の中の大会ですけども、お医者さんや看護師さんまで動員して行う大会です。大体 1 つのイベントをやると、宿泊、それから飲食、移動を入れると大体 2500 万~3000 万ぐらい消費をしているというデータもあります。ですから、この規模でも経済効果があるということがわかってきました。



あとは、やっと J1 に上がってくれたんですけども、サッカー選手…ゴールキーパーですけども、これ結構前ですけど、またちょっとやりたいっていうふうに話をして、体幹トレーニングですね、インナーマッスルトレーニングをフィールドではなく海が本当近くにありますが、ゴールキーパーはこけても、あまりダメージがないということで、フィジカルトレーニングを SUP の上でやりたいというお話もいただいております。

時間の方も押してきましたが、いろいろなアクシ

ョンを起こしてきましたけど、このエリア一体をどうしていきたいのか、これは静岡県の清水港長期構想委員会の実際の資料ですが、元々これ内浜なんですけども、この内浜には、ビジョンというか色が入っていません。ここは全然、見捨てられていたんですが、それは駄目でしょう。ということで、ぜひ三保の内浜にもしっかりと色を入れて、マリンスポーツ、海洋スポーツの聖地として下さい。ということをお話したところ、しっかり長期構想委員会の 35 ページに入れていただいて、県としても市としても、今は前に向かって動き始めて流れになっています。



あとはレクリエーション推進拠点とプラスして、棧橋、この架け替えをしてほしいというふうに訴えたところ、その架け替えの計画が進み測量も始まっています。どういったことでその棧橋を架け替えたいのかというと、これは三保だけじゃなくて、全国的にお話できる話ですが、これスーパーヨットといいまして、海外のオーナーがお持ちの、大体このぐらいで 150 億ぐらいします。150~200 ぐらいの船なんですけど、日本にいっぱい来てるんですね。ですが数が多く、沼津沖ぐらいまでは来てますが着岸できる場所がない。要は棧橋がない。皆さん大体このクラスだと、この船からヘリコプターで箱根に行ったりしてるようです。こういった船の誘致をしたいということです。横浜のスーパーヨットロジスティクスというエス・バイ・エルという会社ですが社長は海洋土木の出身です。1 個上の先輩でウインドサーフィンの先輩です。まあ僕の方がウインドサーフィンはうまかったですけど。1 隻来ると燃料が大体軽油 8000 万ぐらい入ります。大きな船だと 1 億ぐらい入ります。そのぐらいタンクがでかいんですね。ですからちょっと燃料の原価はいくらか知りませんが、仮に 8 掛けとしても 1 億入ったら 2000 万儲かるわけです。ですから、客船が来たときの経済効果と、この船が 1 隻来て 1~2 週間来てくれたときの経済効果、どちらがいいかなっていうと、もしかしたらこっちの方が上な可能性があるということで、今各県でこぞって誘致をしています。棧橋をどんどん作ってます。

瀬戸内は非常にクルーズで静音ないい海面があります。この前のモナコのボート招致には、広島とかあの辺の瀬戸内の人たちがものすごいプレゼンテーションをしに行っています。そういったスーパーヘッドですね、これは横浜にあります。インターコンチネンタルホテ

ルへ行くとこのクレーンがあるんですけど、そこの後ろに新しく栈橋ができて、そこの今エス・バイ・エルという会社がこの栈橋を管理していますが、こういった大きな船がどんどん来てます。こういったところを拠点にいろいろなところに行きたがってるんですね。行きたがってるんですけど、行けるところがないんです。ですから、もっと早く、さっき言いましたパイオニアにならなければいけない。早く静岡県にそういうのをどんどん作っていかないと、来れないんですね。岸壁でもいいんですけど、やはり潮の満ち引きがありますから、こういう船だと、高く乗れなかったり、低くて降りれなかったり、そういった状況になります。あとはプライバシーがない、そういったことも挙げられますね。はいスーパーヨットの話はまたちょっとお聞きになりたい方がいらしたら、また個別に聞いて頂ければと思います。

あとはですね、先端にこういった本当、三保の先端に僻地なんですけれども、バイファールという新しい会社が進出をしてくださりました。この会社は世界シェアのジャクソンというルアーの会社ですね。ルアーの会社と、高階救命器具という皆さんよく船に乗るときに、桜マークがついてるライフジャケット着ますよね。そのジャケットを作っている会社です。そこが合弁会社を作って新しくカヌーフィッシング、SUPフィッシングや釣りに特化したお店を'Ulalenaの横でテナントとして、今、来ていただいています。非常に私達も助かっていますけど今後、その先端にいろいろな企業が来ているいろいろなアクションが流れるのではないかなと期待をしています。

そして、これは鉄先生のアイデアで動き出したんですけど、海底を利用したお酒の熟成です。これも清水港で行っておりまして、最初は宮古島で行っていたんですけど、この清水港の海底でもできるのではないかなということで、実際に行ったところ非常に評判がいい。なぜこれがいいかというと海底、もう海面もそうなんですけど、海の占用の料金ってめちゃくちゃ安いんです。宮古島結構広かったですよね。占用したとき、洞窟の中を借りてやったんですけど、年間二百何十円でした。ですから、なぜダイバーの費用を入れても、1石何鳥かかっていうところがあります。そういった海底の利用方法っていうところでも、非常に今後面白いのではないかなと思います。僕はお酒じゃなくても、言ってしまうんですけど、海底熟成肉をやりたいなとちょっ

と思ってまして、肉だったら1週間ぐらいでできるんじゃないかと思ってます。香りの評価は少し変化が出たというようなデータもありますので、こういったことも行っております。

もうそろそろ時間ですね。今私達が行っている事業の1つにこういう文言の内容があります。内浜エリアマネジメントという、何かといいますと、非常に日本では珍しい、県の考案なんですけれども、ここです。三保は内浜、ここにありますが、ここを占有させていただいて内浜を全部管理せよと、してもいいですよというお話をいただいて、我々と、それから鈴与、清水マリンスポーツ振興会ともう1社、3社でここ今、占有しています。何が、特殊かといいますが、お金は出ないんです。出ないんですけども、ここで営利をしていいんです。要はお金を稼いでいいですよ、お金を稼いでいいですから、その代わりエリアをしっかりと綺麗にしてくださいというような公募で、これ非常に日本でも珍しい一歩でありますし、静岡県はこういった一歩によく踏み出して頂けたなど、あるいは静岡市はよく一歩踏み出して頂けたと思ってますし、これからこういった事業、こういった事例があるということを各県に持ち帰っていただいて、ぜひ各県でいろいろなことを行って頂けたらと思います。

例えば、これは大阪にある和泉、泉南のロングパークという、これPFIで公募を出してやってる事業ですけども、事業期間30年、注目すると、ここですよ。土地はただです。ただ、ただ貸してあげるから、PFIで事業を誰かやり、やってみませんかという事業が出ています。来場者数は150~160万人で、今のところ黒字経営をされている、ちょっと若干私達のやっていることとは毛色は違いますが、各エリアでビーチを活用した、こういったアクションっていうのは、どんどん広がっていくでしょうし、広まっていかないと現場が保てないのかなと思っています。

最後になりますが、今後の我々の考えているコンセプトは、特にこの三保半島は世界文化遺産ですから、文化教育芸術あるいはスポーツというテーマでこれから走っていくと思われれます。我々はEducationというワードと、リゾート、ワーケーションという言葉はあったと思いますけどもEducationリゾートというワードでエディリゾートというワードを翔洋で出願中です。このEducationリゾートというのは、要は教育をした後に勉強した後、あるいは部活をした後、合宿をした後にバーベキューをしながらみんなでその日を振り返ってもいいんじゃないか、事務机ではなく、みんなでゴロゴロしながらその日のプレーを振り返ってもいいんじゃないか。

簡単に言えばそういうことなんですけども、今、この先端でいくつかそれが始まろうとしています。ちょっと後ほどお見せしますが1つは乗馬、先端に乗馬クラブが来る予定です。Educationリゾートというワードで今、我々は進み始めているところです。Educationリゾートの1つの中でも、市長がおっしゃってるんですけど、僕の中ですごく大事にコンフィネンシャルって感じですがすごく大事に収めてたんですけど、三保の真ん中にあるのは、清水港の真ん中に埋立地があります。その埋立地を全部埋め立てて、海洋文化推進拠点の形成をすると、JAMSTEC

プロジェクト どのようなことが動き出したのか

***地場産品の活用**

- ・三保サーモンや折戸ナス、枝豆やトマト など 地場産品を活用したメニューを提供
- ・海底熟成酒、地ビール製造
- (松の葉モルトを使用したビール=富士山羽衣ビール)



現在地元酒 臥龍梅も沈酒中



清水港に沈めたお酒

とか様々な研究団体がここへ来て、いろいろな研究をしよう。水深 2500m もすぐ裏にありますから、非常に良い成果が得られるのではということで、ここに上川陽子さんとか深沢先生とかいろいろな方が始め、ここにそういうものを持っていきましようという動きがあります。そしてありましたけれども、ここを全部埋め立てるといふふうにおっしゃったので、それ全部埋め立てたら一体どのぐらいの負担になるんですか。僕は直球で聞きました。大体 300 億ぐらいだとおっしゃったので、300 億ってことは JAMSTEC さんとかいろいろな研究者の皆さんが、これまでだいぶ黒字になってきたような数字も見ましたが、おおよそやはり非常に厳しい数字でやられてるんじゃないかなという中で、仮に 20 億 30 億赤字で、それを運用された場合、その 300 億の有益な資産というのは 10 年しか担保できない。その 10 年後どこがどうやって運営し、このお金払っていくのかということで、半分はやはりリゾートライクにしましよ、しっかりマネタイズしましよ。ここは、マリナー事業です。さっき言ったような大きな船専用です。小さな船ではなくて大きな船専用で、海面の占用料も非常に安いので、マリナー事業って非常に収益率が高いんです。

それを持って行きましよう。あるいはホテルも静岡県はないのでなかなかこの静岡県に滞在をしてくれる機会が少ないということで、現状こういったモデルは、県も市も非常に特に難波市長は非常にパッションが高く、事業として進めているところだと思います。

最後になりますけれども、今後何をしたいかなきゃいけないのか、やりたいやりたいやろうやろうっていうことだけでは、やはりできなくて、陸上にも調整区域とかあって建物が建てられませんよとか、特にそんなルールばかりです。静岡は特にそうで、工業用地も市街化調整区域ばかりで、大きなプロパティが用意できないんです。ですから、まず海岸を使える場所に変えていく、これは条例だったり法令だったり、まさに今だったら変えられると思います。皆さんにとって熱い場所なら利用できないし、場所も要は、法人税やそこを使う人からの収益は県も欲しいわけですから、もうまさにそのエリアごとで法令や条例を変えていくというアクションをぜひとって頂きたい。難波さんは非常にその辺は今後、柔軟に考えて頂けるとは思います、市街化調整区域、いろいろなものを立てていけるような状況、あるいは特区として、それこそ海洋スポーツ特区とかの話も

今後出てくるのかもしれませんが。

最初に言いましたけれども本日お越しの皆様スペシャリストですから、そしてここに足を運んで頂けているということは、もう海大好きなわけで、今後何とかしたいと思っている方々ですから、ぜひここにいらっしゃる皆さんで日本の海岸線、そして海を変えていく。

これは本当に今かなと非常に強く思っています。静岡県と言いましたけど、日本が、あいつらよくやってやったよねっていうバイオニアになれるようなアクションを作っていくって頂ければと思っています。それを作るにあたって大事な事なんですけどまず、みなさん、インバウンド、よく言うんですよ。僕、インバウンドじゃないんですよ。地元の方に気に入って頂ける場所、マダムっていいんですけど、地元の方に気に入って頂けない場所は、海外の方もあんまり好きじゃないです。なぜかという僕らが海外に遠征に行ったときに、やはり地元の漁師さんが行くとどこ、地元の人たちが美味しいとどこって言って必ず聞いてます。ですから、やはりまず作るとすると、地元の方にはしっかりと理解をして頂ける、いやそこ行ったらいいよって言って頂ける場所やお店をぜひ作って頂けたらいいんじゃないかなというふうに思ってます。あとはやはりバラバラするのではなくて、同じベクトルですね、やはり話し合っ、こういう方向性でいこうよということをしかりエリアで話し合っ、1 人リーダーシップ、イニシアチブを取る人がいればですね、その人の色で進んでいくことが大事ではないかなと思います。コロナのときもありましたけど、非日常近くで楽しめるこれを今後の 1 つのフェーズかなというふうに思っています。

あと最後、やはり何回言いますが僕の中でもパッションしかない、こんな私はポンコツですよ。本当は、そんな私がこのように活動させて頂き、最前線でやらせていただけてるっていうのはもう、情熱しかありません。ぜひここにいらっしゃる皆さん、新たなパッションを共有して次に進んでいって頂けたらなと思います。今度これね、乗馬、今これテストしてるところですけどずっと内浜から、羽衣の松までですね、歩いて行けるようなプランを作ったり、外国人にちょんまげと、着物を着せてちょっと歩いてもらおうとか、いろいろ考えてますけど、ちゃんとシナジーがあるんですよ。暴れん坊將軍の撮影地なので、これを着させてあげれば一番いいかなと思ってます。

例えば、これハンティントンビーチでてるこういう大きな桟橋ですけど、日本でこれをやろうと思うとなかなかハードル高いじゃないですか。これできないですかって聞いたらできなくはないよと…。

今、千葉の方でもこういうのができ始めてます。この PFI でやってるんですけど、こういうのができ始めてますから、何が言いたいかといいますと、そこはできないんだよね、それも無理なんだよね、ではなくて、できないじゃなくてできるようにどうするか。エリアごとに、これから大きな変革時期が来るとは思いますから、それをしっかりと実動をして実行して頂けたらなというふうに思います。はい、すみません、拙い話でしたけど長々とご清聴頂きまして、本当にありがとうございますどうもありがとうございます。

今後やるべきこと
まとめ

エリアごと法制や条例の見直し
ローカルルール策定など

三保の皆さんと
日本で一番の海と陸との創造を

静岡県が日本国がバイオニアになれるようなアクションを

(平野：司会)

はい。合志先生ありがとうございます。これまでの活動から、これからの展望まで、文化スポーツ、それから教育リゾート、いろいろな観点からお話いただいたんですけども、あと15分ぐらいありますので、フロアの皆さんからご質問やご意見など頂けたらと思います。挙手をされて、ご所属を言っていたらご質問頂ければと思います。いかがでしょうか？

(小林)

私先ほど発表させていただいた、湘南でカヌークラブの方をやっております小林と申します。合志先生とはよくお話するんですけども、こちらのスペースです、6人乗りのアウトリガーカヌーなんですけど、長さは44フィートを超えてまして、約13m、最近、タヒチの方が本場で、そちらの方の数を見ているおそらく49フィートぐらい、もう少し長いものはありまして。私、湘南でカヌーをやってるんですけど、正直な話をすると、場所の限界を感じています。これ以上の普及に関しては。そこで今、お話を聞いていてこの場所は非常にいいなと思っておりますが、カヌーの方が入る余地はございますでしょうか？

(合志)

はい、ご質問ありがとうございます。パッションがあれば…。

(小林)

パッションしかありません。

(合志)

それは冗談なんですけれども、本当です。もう本当です。ただ今後、内浜に関してはエリアマネジメントということで、あそここの場所は我々が管理をしていますから、横の繋がりですとか、ヨットがあり、他のカヌーがあり、ウインドサーフ、サップ、いろいろな種目がありますから、そこと肩を並べて、この繋がりですっきりといわゆるマリンスポーツの聖地を形成して頂けるといふことであれば、全然可能かというふうに思いますし、僕らもそれは求めたいところでありましてアウトリガーカヌーに関しましては、特に、パドルスポーツの最古、一番古いポリネシア文化を持った船だと思っておりますから、そういった文化を持った船が来てくれるというのは我々にとってもありがたい話かなというふうに思います。

(小林)

ありがとうございます。

(平野：司会)

その他いかがでしょうか？では、後ろの方お願いします。

(服部)

素敵なお話ありがとうございます。神戸大学の大学院の服部恵理子と申します。よろしく申し上げます。普段、船のおもてなし文化とかに興味を持って研究しているんですけども、明日もそれで発表させていた

だんですけど、あの先生の経営されてるホテルで何か船らしさとかを海らしさをどのように演出されてるのちょっとコツがあればお伺いしたいです。

(合志)

ありがとうございます。ですね、船らしいかどうかはちょっとあれなんですけれども、2階の宿泊施設からはですね、正面に海が見えるんですけど、少しソファにしゃがむと、もうビーチが見えなくなるんですね。そうすると海しか見えないんですね。逆に言うと、ビーチから部屋の中や見られてはいけないというところもあるんですけども、ソファから海を見ると、ガラス張りに海があります。

船の中にいるような、そういった空間にはなっています。それから、そうですね、各種アメニティもそうですけれども、先ほど言ったスーパーヨットのキャビンアテンダントと言いますか、要はクルーですね。クルーのアテンドも弊社がやっていたときがありますので、そういったおもてなしも含めてですね、まだまだホテルオペレーションとしては未熟なところもあるんですけども、やはりお客様に喜んで頂ける、こられた方にごおもてなしをしたらいいかは、そういったところから学ばせていただいております。

(平野：司会)

あと、5分ぐらいあります。どうぞ。

(林)

国際武道大学の林と申します。どうも貴重な発表ありがとうございます。先生が発表された中で、地域との連携は非常に重要だというお話が非常に心に刺さりまして、先生が考えられるサーフローカリズムのところを、三保の松原が抱えているサーフローカリズムと、今日、マルシェの方とも共同されたということで、その辺の先生の考えと、どういうふうに地元の方々と先生がおっしゃった、よそ者と言われる方々の合意形成がされたかというのを教えて頂きたいと思っております。

(合志)

ありがとうございます。当初、こういったビジネスモデルでやり始めたときは100%コミットを目指してました。全体に理解をしてもらおうと思ってんですけど、これはですねやはり無理です。無理だということがわかりました。なので、7割8割ぐらいの皆さんにいいねと言って頂ければなど、言って頂ければ、合格というふうに今は動いていますけど。特に三保エリアっていうのは言い方が新しいちょっと失礼かもしれませんが、ローカリズムが非常に強いところで、何もやらなかったときは、早く、誰かなんかやらなきゃ、静岡弁で「早くやらざあ」って言うんですけど、実際にやると、「なんでそんなことやるんだ」っていうふうにおっしゃったりとか、「やれって言ったじゃないですか」と言っても、おれは「そんなの聞いてねえぞ」って、俺は聞いてないというフレーズが来たりとか。だけど俺は聞いてねえって言ったのに、ちょっとうまくなって人が集まってくると、あれは「俺がやれって言ったんだよ」っていう。

いろいろある中で、やはりそこはしっかりと地元の

方もこうやってはですね、僕も喧嘩するタイプではないので、お話をする中でやはり100%は無理だっていうふうになっちゃったときに、心もすごく楽になりました、やはり地元の方が求めるものと、そうでないものもあると思いますけれども、こういったものを作りたいと思います、ということは、特に宮城島市議が三保のエリアの方ですから、そういった議員さんにも当然こういうの作りたいんだけど、あるいはこれからこうしたいんだけど、どうでしょうかというふうにお尋ねをして、合志がこういうのやりたいと言ってるけどどうだということで、例えば、連合自治会ですね。そういったところにお話を頂き、やはり根回しといいますか…根回しは駄目かな。アンダーグラウンドでの活動といいますか。お仕事ですね。非常にやはり慎重に丁寧にやってきたつもりでありますけど、本当に宮城島さんには、ありがたく感謝しています。ちょっと答えになったかどうかですね。

(林)

はい、ありがとうございます。

(平野：司会)

はい、ありがとうございます。その他、あと1つぐらいですみません。いらっしゃいますか。はいお願いします。

(淵)

いろいろご講演ありがとうございました。神戸大学の淵と申します。神戸大学といっても大型外国航路の船長航海士養成のところでやってるんですが、個人的にはヨットをやっつけて、そういった中で僕はこういう話大好きなんですけども、大体なんつうかね、今までのいろいろな事業、会社さんがいろいろあってやるんですね、大体言われるのが、危ないって。どうするの事故が起こったら、こういう視点もすごく多くて、特にこないだ滋賀県が何かでね、どこかの大学さんのボートが流れついて、よくわからんような報道されましたけど。僕自身はよくやったねと、事故を起こさずに全員帰ってきてすごいねって言ってるんですけど、風潮はみんなそうじゃないですよ。そうすると、こういうことをやると、そういった目線でいろいろ見られる方ってとても多いような気がするんですけど、パッションで乗り越えたといわれては、それまでかもしませんけどちょっと具体的な参考になることがあったら教えて頂けないでしょうか？

(合志)

ありがとうございます。先ほど、研究発表の中にもちょっとありましたけれども、やはりその指導者の専門知識を持った指導者の不足というのは非常に大きい中で、我々の事業に関しては、なんせ海洋学部ですから、ここの卒業生がほとんどうちの社員です。はい。ですから、ここの大学とすごくリンクをしていますので、私が信頼おけるよう、実働、エビデンスのある実績のある皆さんがうちでスタッフをやってくれていますので、年間そうですね、3,000名～4,000名の海洋スポーツの教育の方をやるんですけども、当然、事故もないですし、運営はしていますけれども。やはりですね、リスクとい

うのは、やはり私が取らざるを得ないと思います。この気持ちは持ってなきゃいけないと思います。リスクがないっていうことではもう多分できないと思います。それは安全にとってもそうですけど、リスクヘッジはしますけれども、やはりどこかでのリスクっていうのは最終的に僕が取る覚悟を持ってないといけないですし、それはお金の面でもそうです。決算を個人で書いてますから、個人で数億円っていうリスクを持って今、進んでますから。そういうリスクを背負ったときに地元の人たちがどう見てくれたかということ、僕も大阪出身なんで、神戸で甲子園を見てたんです。それはちょっと全然関係ないですけど、何が言いたいかということ、リスクを取ってやった瞬間に地元の人たちが認めてくれたんです。

例えば、助成金、補助金を取って何かをあいつやっていると、僕とのビジネス形態が違ったので、あいつ自分で全部やってるらしいよ。個人リスクで全部やってるらしいよ。何か怪我したら責任取らなきゃなんないんだよ。というところでみんなが応援してくれるようになりました。ですから、やはりどこかで事業をやるときには、やはりリスクっていうのは自分でどっかに抱えていないと、非常にストレスですけど、あるのかな。ちょっと、解決っていうとなかなかやはり言う人はいますし、いろいろな人の考え方がありますから、全部そういうことじゃ100%同じベクトルにというのはなかなか難しいですけども、やはり僕もリスクを持ってやってますので、ぜひご理解を頂きたいという最終的にパッションになっちゃうんですけど。そういう思いでやってますけど、なかなか具体的に物理的にこういうことをしたら上手くいくっていうのは、どうなのか難しいのかもしれないですけどね。リスクを取った時点で前に進めたというのは僕の中での結果でした。

(淵)

はい。ありがとうございます。

(平野：司会)

ありがとうございました。合志先生、もう本当に実践に即した、今、活動されてる内容を含めて、もう熱いパッションでお話し頂きまして、これからの我々の海洋スポーツによる地域振興といえますか、進み方っていうのを示されたと思います。

では合志先生にもう一度大きな拍手をお願いします。



本稿は、Creative Commons ライセンス
BY/Attribution (表示) -SA/Share-alike (継承)
4.0 国際 (CC BY-SA 4.0) の下に公開されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

□第13回 日本海洋人間学会大会 アカデミックコンテスト 開催概要□

「海洋人間アカデミックコンテスト」ポスター発表

出場校：北海道小樽水産高等学校、静岡県立焼津中央高等学校、静岡県立焼津水産高等学校
 静岡県立清水南高等学校、城南静岡高等学校、東海大学付属静岡翔洋高等学校
 コーディネーター：鉄 多加志（東海大学）

海洋人間学雑誌, 13(3):85-86, 2025.

キーワード： 高校生, プレゼンテーション, アカデミックコンテスト.

本アカデミックコンテストは、第13回学会大会の初日となる2024年11月23日16時過ぎより、学会開催地である東海大学静岡キャンパスの8号館4階の教室の外からも掲示物やプレゼンテーションを見ることが出来るガラス張りのゼミナール室を利用して開催しました。

前回大会の第12回において、エキシビションとして北海道小樽水産高等学校がポスター発表を行いました。そのポスター発表における考え方や方向性は、私たち学会員が思っていたよりも予想以上に質が高く、このことがきっかけとなり、この発表以外にも広く高校生の海に対する認識や見識も聞いてみたくなりました。

学会において自分たちの研究の成果発表をすることは、現役の大学生でも高いハードルであると考えます。もちろん、そのようなクオリティを求めているわけではなく、高校生目線の海に関する意見や提言が聞ける場を設けることができないだろうか、その時に思いました。

第13回大会は、本学会が始まって以来、初めて東京海洋大学以外の場所で開催される大会となりました。場所は、東海大学静岡キャンパスで、私は大会実行委員長に任命されました。大会の運営については、これまでに経験はなく、拝命当初は不安しかありませんでした。と同時に何か新しいことを、この機会に提案してみようという意欲も湧いていました。これまでに、全国の中高生を対象とした海のアカデミックコンテストの審査員をやっていた経験があったため、そのフォーマットを利活用した企画を理事の皆さまに提案いたしました。

自分自身は、長年その審査を担当してきたことで、ある程度の成功のイメージはできていたのですが、そのプロセスをうまく伝えることが難しく、なんとか企画の運営の承認を得られたものの、どのような成果をみることが出来るかは、全く未知数の状態でのスタートでした。

発表のフォーマットを作成し、募集のポスターやチラシを作り大会実行委員会で承認を得たのちに、学会のホームページや個人のSNSを使って、情報の提供を行いました。

Japan Society for Marine Activity
 日本海洋人間学会

第13回 日本海洋人間学会大会
 ワークショップイベント

海洋人間 アカデミック コンテスト 2024

水産高校と海洋高校、全国の海に興味のある高校生のみなさんへ！

人と海のかかわりについてA0(ゼロ)のポスターに思いやイメージをまとめて、みんなの前で発表してみませんか

あなたの知的で熱い思いを大募集！

応募費用や大会の参加費は無料です

* 審査対象は当日、会場にポスターを掲示してプレゼンテーションを行える方に限ります

応募期間: 令和6年7月16日～10月7日 発表: 11月23日(土) 東海大学静岡キャンパス8号館
 * 応募多数の場合は事前審査があります <https://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/campus-shizuoka/>
 お申し込み・お問い合わせ 東海大学静岡キャンパス 大会実行委員会
 〒424-8610 静岡市清水区折戸3丁目20-1 TEL.054(334)0411代表 Mail:tetsu@tokai.ac.jp

<https://jsmta.jp/>

ポスター発表募集のチラシ

近隣においては、協力をお願いできそうな高校の先生のところに説明にうかがい、主意や企画に対する理解を得て、実際にエントリーしていただけた際には、思ったよりも時間を要してしまいましたが、相互に生徒に対する新たな学習機会の提供をキーワードに試行錯誤を繰り返しました。

最終的に県内5校、県外から1校の計6校のエントリーがあり、以下の演題について、掲示したポスターの前でプレゼンテーションを行いました。

演題（受付順）

- ★北海道小樽水産高等学校
「双胴船の操縦プログラムについて」
- ★静岡県立焼津中央高等学校
「海洋ゴミと環境 DNA 解析による静岡県焼津の魚類相の季節変動の推察」
- ★静岡県立焼津水産高等学校（優秀発表賞）
「人も魚も住みやすい環境を目指して～海中清掃大作戦！」
- ★静岡県立清水南高等学校
「美しい未来を守るために」
- ★城南静岡高等学校
「釣りによる清水港周辺の活性化への提案」
- ★私立東海大学付属静岡翔洋高等学校
「海洋」がつなぐ「学び」と「地域」～東海大学付属静岡翔洋高等学校の包括的な海洋社会学習～について」

各校ともに、発表において学校の特色や研究グループの個性が光る内容やパフォーマンスが展開され、その後の質疑応答についても採点に加味されました。

審査については、久門会長を含めた5名の学会理事が審査員として採点し、その合計点によって行いました。

採点は、テーマの魅力、写真・絵・デザイン・ストーリーの面白さ、オリジナリティ、総合力・完成度の4つのポイント（配点は各項目1～5点）から行い、最終的に内容とプレゼンテーションの練度が高かった静岡県立焼津中央高等学校が、初代の優秀発表賞の栄誉を手に入れることになりました。

総評として、漁業支援の観点や基調講演のテーマと親和性の高かった海や海辺を中心とした地域創造および連携に関する発表、海ごみに関する問題など、どの発表にも高校生のフレッシュで多角的な視点から海に対する思いがみられ、指導された先生の感性や工夫を含めて、ポスターに綴られていたように感じました。



出場校に対する参加証明書の授与



「優秀発表賞」を受賞した焼津中央高等学校の発表



プレゼンテーションを行う東海大学付属翔洋高等学校

本企画は、継続性を持たせることで、これからの海業を担ってゆく、もっと多くの高校生諸氏の海に対する声が聞けるのではないかと期待を込めて、学会として継続的に行う方向性を検討しております。今後も多くの学校に興味を持っていただけるように、内容を検討して、参加に対する意義や理解を広げて行けるようにしたいと考えます。

今回の海洋人間アカデミックコンテストに対して、ご協力を賜りました運営の皆様、ご参加をいただきました生徒の皆さん、引率ならびにご指導をいただきました教員の方に、この場をお借りして改めてお礼を申し上げます。

（実行委員長 鉄 多加志）

編集後記

第13巻第3号は、研究資料1編、事例報告1編と第13回学会大会における基調講演の講演録、ならびにアカデミックコンテストの開催概要を掲載しております。

研究資料は、スタンドアップパドルボーディング(SUP)の事故対策における内容であり、事故者数が増加している現状があります。本学会においては、SUPに限らず現場において、活動するにあたり「安全第一」の意識啓蒙が最重要と考えます。

事例報告は、伝統文化帆掛サバニを大学実技授業に取り入れた内容であり、教育的な視点から、海洋に関する様々な種目などを大学に限らず、高等学校などの学校教育の授業に活用することが、今後の海洋人間育成に役立ち、期待したいと思います。

基調講演の講演録は、残念ながらご都合により参加できなかった皆様にもとてもわかりやすくイメージでき、講演会場の雰囲気を感じるような内容となっています。合志明倫先生の「パッション」が地域の人々の心を動かし、地域振興に役立ち、地域全体で幸せをつかみ取っている様子が伺えると思います。

海洋人間アカデミックコンテストでは、出場校として、北海道小樽水産高等学校、静岡県立焼津中央高等学校、静岡県立焼津水産高等学校、静岡県立清水南高等学校、城南静岡高等学校、東海大学附属静岡翔洋高等学校の6校による、各校における海洋環境に関するさまざまな取り組みの内容になっており、生徒たちのとても真剣な活動が目につかぶと思います。

次号の発刊におきましても、皆様のコミュニティともなるような役割を果たしていければと思った次第です。本号の発刊に伴い、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

(小泉 和史)

日本海洋人間学会編集委員会

委員長／松本秀夫

副委員長／小泉和史

委員／中原尚知、遠矢英憲、中塚健太郎。

海洋人間学雑誌 第13巻第3号

2025年3月発行

発行者 久門明人

発行所 日本海洋人間学会

〒108-8477 東京都港区港南 4-5-7 東京海洋大学内

郵便振替 加入者名 日本海洋人間学会

口座番号 00150-6-429943

TEL/FAX : 03-5463-0638 (藤本研)

URL : <https://www.jsmta.jp/>

E-mail : jsmta@jsmta.jp

Vol.13 No.3

March 2025

Japanese Journal of Maritime Activity



Japan Society for Maritime Activity (JSMTA)